続縄文文化における物質文化転移の構造

Structures of Transferring Material Cultural Attributes on Intercultural Contacts in Epi-Jomon Culture

鈴木 信

SUZUKI Makoto

はじめに

❶属性転移から見た文化接触

❷異質・同質接触としての物資交換

❸文化接触と物資交換の関係

［論文要旨］

続縄文文化の遺構・遺物には，「変異性が強く・現地性が弱く・転移は容易・伝達する際に欠落しにくい」という表出的属性，「変異性が弱く・現地性が強く・転移は容易でなく・伝達する際に欠落しやすい」という内在的属性，それらの中間的属性が備わる。また，属性における不変性・現地性の強弱は「遺構の内在的属性≧遺物の内在的属性＞遺構の表出的属性＞遺物の表出的属性」である。そして，内在的属性の転移は親密な接触によって伝わり，表出的属性の転移は疎遠な接触においても成立する。そのため，内在的属性の転移は型式変化の「大変」といえ，表出的属性の転移は型式変化の「小変」といえる。

遺構・遺物の型式変化とは時空系における属性転移であり，空間分布の差異として第一～五の類型で現れる。そして，属性はコト・モノ・ヒトの授受に付帯して転移し，転移先において文化同化・文化異化・文化交代を起こす。

物質交換は文化接触の一種であり，異質接触（渡海交易）においては「もの」を動かすために「かかわり」があり，社会的関係を緊密にすることで物理的距離を克服する（「ソト」関係の「ウチ」化）。同質接触（域内交易）においては「かかわり」の結果として「もの」が動き，基底には社会的距離が恒常的に縮んだ関係（「ウチ」の関係）において行われた。

渡海交易と域内交易と生業の関係は弥生後期に東北地方に起こった利器の鉄器化が誘因となり，その後，鉄器の流通量が増加することで，域内交易は交換財の調節機能の強化が求められ，生業は交易原資のための毛皮猟とそれを支える生業の二重構造を生み出す。渡海交易Ⅱａ段階に渡海交易・域内交易・生業が直結して文化異化がおこる。渡海交易Ⅱｂ～Ⅳ段階には鉄器・鋼の需要が恒常的となり文化異化が継続する。Ⅳ段階には文化異化が収束し，交易仲介の役割を失った東北在住の北海道系続縄文人が故地に帰ることで新たに東北地方から北海道への属性転移が生じる（擦文文化の成立）。

【キーワード】表出的属性，内在的属性，中間的属性，渡海交易，域内交易，文化同化，文化異化，文化交代

はじめに

私が考える文化接触は，文化間においてヒト・モノを授受する関係であり，それらに付帯するコト（情報）・付帯しないコト（情報）の授受もある。関係は文化変容（文化同化・文化異化・文化交代）をつうじて顕在化する。そして，授受の動機には自発的動機（興味・必要など）や強制的動機（支配・統制・強要など）がある，と考える。

考古学における文化変容とは属性転移による型式変化であり，転移先の属性と差異が見られない場合，転移先の属性と差異がみられる場合が仮設できる。これらにより考古的事象の差異として検討可能になる。ただし，考古学は「モノつうじてみたコト，モノをつうじてみたヒト」という手法をとるのでモノ自体の分析手法が問題となる。そこでモノについてヒト・コトがあらわれる属性の定義が必要となる。

属性には「外的（層位学的）な証拠」と「内的（型式学的）な証拠」［林　謙作 1990 a］がある。林は外的な証拠を「事実に基づく説明」，内的な証拠を「論理的な説明」と定義している。

私は層位学的事実には観察者の解釈が付加されているので，条件付き前提であると考える。よって，根拠として断定される過程の違いに基づき，「外的根拠」を帰納的推論のための「検証的・必然的根拠」，「内的根拠」を仮説的推論のための「類推的・蓋然的根拠」と言い換える。また内的根拠には，「overt elements：じかに見える要素（紋様など）」と「covert element：じかに見えない要素（素地調整）」［林　謙作 1990 b］が備わると説く。私はそれを受けて，遺構・遺物の属性を下記のように分類し用いている［鈴木　信 2004 a］。

内在的属性：全的完成事象からは窺い知れず，属性転移には時間・場面の共有が必要。

表出的属性：全的・部分的完成事象からでも理解でき，属性転移には時間・場面の共有を必要としない。

中間的属性：属性が場合によって，内在的または表出的に移行する。

北海道の続縄文化以降の遺構・遺物においては，内在的属性に当たるものとして，土器であれば胎土選択・成形・乾燥・焼成，石器であれば素材形態・石核形態，墓制であれば墓坑底平面形・主体部構造・内部施設・埋葬姿勢（これらは，葬制執行の専業集団によって取り扱われる場合は中間的属性である），竪穴住居であれば柱組構造・柱穴先端形・竈構造があげられる。

表出的属性に当たるものとして，土器であれば文様要素・文様割付，石器では形態，墓制であれば外部施設，竪穴住居であれば竪穴平面形・主柱配置・炉や竈の設置位置があげられる。

中間的属性に当たるものとして，土器であれば器形・施文方法（描順と原体）・調整があり，複雑な器形を造る場合は内在的属性へ移行し，単純な器形を造る場合は表出的属性へ移行する。施文方法・調整は見て真似できるが，その意味・効果が理解されなければ痕跡的になる。石器であれば石材があげられる。墓制であれば副葬品があり，個人の特殊な意図を含む副葬は内在的属性へ移行し，集団の意図を表す意図がある副葬は表出的属性へ移行する。竪穴住居であれば規模・周堤帯の有無・炉の規模と形態があげられる。

❷−1で詳述するが，文化接触の一面は物資交換であり，異質接触として「遭遇型交易≒沈黙交

易」，同質接触として「域内交易」，異質接触を同質化する中間な交換「渡海交易」がある。

各遺物・遺構の具体的属性をとりあげ，属性転移に見える文化接触の関係・程度を考察し，属性交換と物資交換の関係についても考察し，続縄文文化における文化接触の構造を明らかにしたい。

❶……属性転移から見た文化接触

1．遺物における属性転移

道南部・道央部・道東北部（道南・道央・道東北と表記）に固有の型式が並立する時期を「前葉」，三地域に固有な型式があるいっぽうで，地域を横断する型式がみられる時期を「中葉」，三地域に共通の型式がみられる時期を「後葉」に分ける。したがって，「前葉」「中葉」については主に「道南」・「道央」・「道東北」の地域ごとに述べ，「後葉」は北海道をひとつとしてのべることになる。「前葉」と「中葉」が弥生時代前期～後期に，「後葉」が古墳時代前期～飛鳥時代に並行する（図1，表1）。

図1　地域区分

表1　時期区分と土器型式の対照

		東北北部		道南	道央	道東・道北		西暦（c）
弥生	前期		続縄文前葉	尾白内Ⅱ群	H 37 丘珠	フシココタン下層式		前5 c前葉～前4 c中葉
		砂沢式						
		二枚橋式		青苗B（古），兜野式	H 317	興津式	元町2式	前4 c後葉～前2 c前葉
				青苗B（新），下添山式	（アヨロ1式）	下田ノ沢Ⅰ式	宇津内ⅡaⅠ式 宇津内ⅡaⅡ式	
	中期	宇鉄Ⅱ式	続縄文中葉	西桔梗B_2	アヨロ2a式 / H 37 栄町			前2 c中～後葉
		田舎館2・3		南川Ⅲ群	アヨロ2b式 / 江別太1式			前1 c前葉
				南川Ⅳ群	アヨロ3a式 / 江別太2式	下田ノ沢Ⅱ1式	宇津内ⅡbⅠ式	前1 c中葉～1 c前葉
		念仏間式			後北A式			
	後期	家ノ前式/（九艘泊）		聖山KⅡ群	（アヨロ3b式） 後北B式			1 c中葉～後葉
		（小牧野・烏間）		聖山KⅡ群	後北C_1式	下田ノ沢Ⅱ2式	宇津内ⅡbⅡ式	2 c前葉～後葉
古墳	前期	赤穴式/塩釜式	続縄文後葉	後北C_2・D式（古・中）				3 c前葉～4 c前葉
		塩釜式		後北C_2・D式（新）/円形・刺突文土器群Ⅰ（以下，円刺土器群と略す）				4 c中葉～後葉
	中期	南小泉式		円刺土器群Ⅱ～Ⅲ		円刺土器群Ⅱ～Ⅲ・十和田式		5 c前葉
		引田式		円刺土器群Ⅳ～Ⅴ		円刺土器群Ⅳ～Ⅴ・十和田式		5 c中葉～後葉
	後期	住社式		円刺土器群Ⅵ～Ⅷ		円刺土器群Ⅵ～Ⅷ・十和田式/江の浦B式		6 c前葉～後葉
飛鳥		栗囲式		円刺土器群Ⅸ～Ⅹ		円刺土器群Ⅸ～Ⅹ・江の浦B式		7 c前葉～中葉
				円刺土器群Ⅺ		円刺土器群Ⅺ・江の浦B式		7 c後葉

＊東北北部は青森県史資料編・考古3（2005），道東北は熊木俊朗ほか「北海道における続縄文～アイヌ文化期の歴年代の検討」『北海道における古代～近世遺跡の歴年代』（2007）を参考，道央は鈴木　信 2003 a，道南は鈴木　信 2008 による

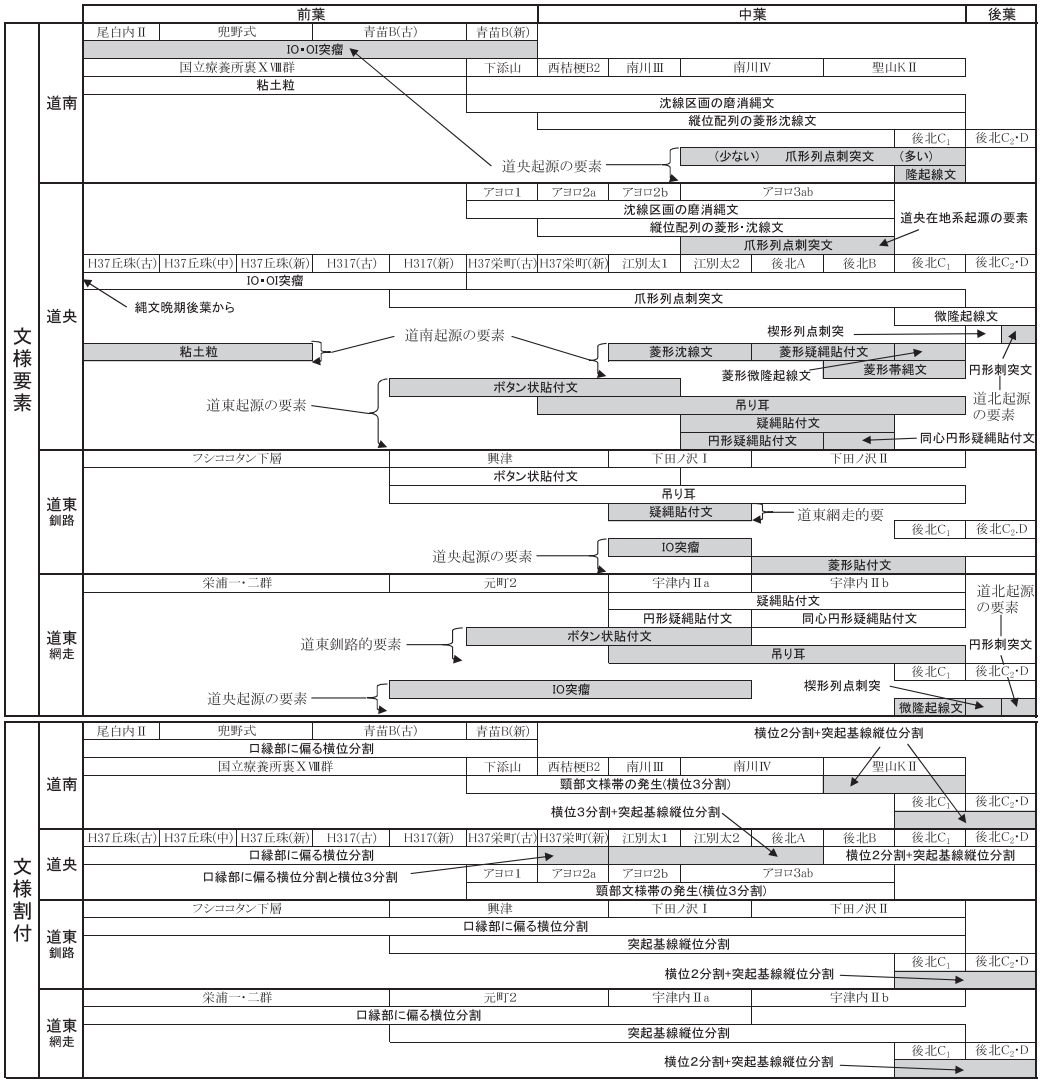
(1) 土器[1]

a．文様要素と文様割付：表出的属性（図2，表2）

〈道南部起源の文様要素：前葉～中葉〉粘土粒は砂沢系の国立療養所裏遺跡ⅩⅧ群［七飯町教育委員会2000］にみられ，道央ではH37丘珠古～新までみられ，道東北にはない。恵山式に通有の沈線区画の磨消縄文は道央では江別太式期のみにみられ，道東北にはない。

〈道央部起源の文様要素：前葉～中葉〉突瘤文は外面から内側へ刺突（OIと表記）と内面から外側へ刺突（IOと表記）があり，OIは晩期後葉前半にIOは晩期後葉後半に道央で発生し［赤石慎三2001］，H317期には廃れる。道南ではIO・OIが兜野～青苗B式にみられ，道東釧路ではIOが下田ノ沢Ⅰ式，道東網走ではIOが元町2～宇津内ⅡaⅡ式にみられる。爪形刺突列点文は道央のH317期新に発生し，道南では南川Ⅳ群～聖山KⅡ群期に採用され，道東北にはみられない。この文様はアヨロ3ab式期の白老町アヨロ遺跡（太平洋側）には見当たらず，同期の余市町大川遺跡（日本

表2　土器の表出的属性



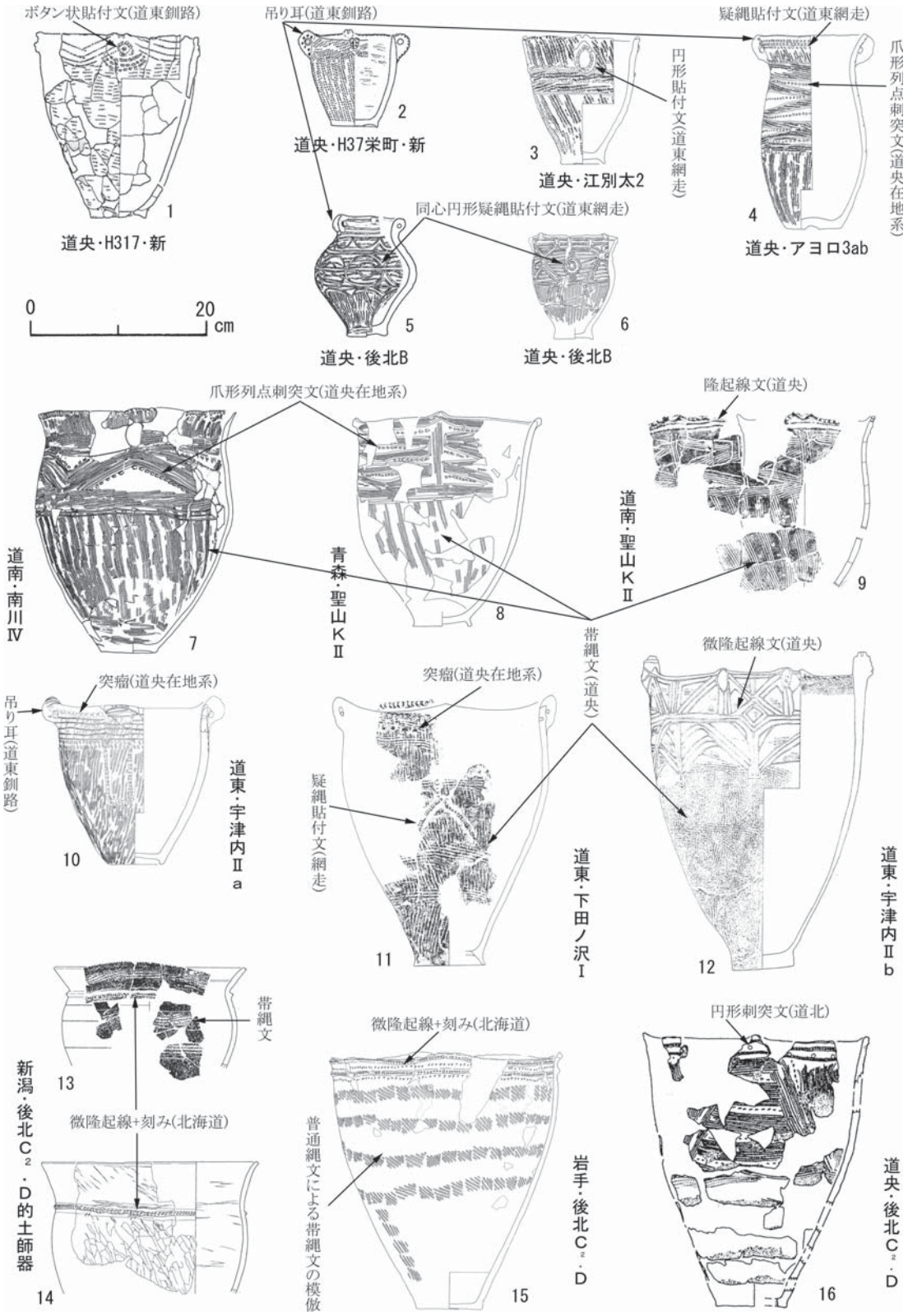


図２　表出・中間的属性における主な異系統要素

海側）にあるので日本海側を介して道南に伝わった。微隆起線文・隆起線は道央の後北式C_1式に発生し，道南の聖山KⅡ群には口縁部に隆起線，道東網走では宇津内ⅡbⅡ式の上半部に微隆起線文が採用される。

〈道東北部起源の文様要素：前葉～中葉〉ボタン状貼付文は興津式に発生し，道東網走では貼瘤として元町2式Ⅱ類［熊木俊朗1997］～宇津内ⅡaⅡ式に採用される。道央ではH317期新～江別太1式にみられ，道南にはみられない。吊り耳は興津式に発生し，道東網走では宇津内ⅡaⅠ式に採用され，道央ではH37栄町新～後北式C_1式にみられ，道南にはみられない。疑縄貼付文は道東網走の宇津内ⅡaⅠ式に発生し，道央では突起下の縦位疑縄貼付文として江別太2に初採され，後北B式に盛行し，道南では聖山KⅡ群にある。円形の疑縄貼付文は道東網走の宇津内ⅡaⅡ式に発生し，道央では突起下の円形疑縄貼付文として江別太2～後北A式に採用され，道南にはみられない。同心円形の疑縄貼付文は宇津内ⅡbⅠ式に発生し，道央では後北B式に採用される。

〈後葉の文様要素〉後北C_2・D式「新」にはOI円形刺突文が現れ，口縁部の横位微隆起線が隆起線化する。円形・刺突文土器群（以下，円・刺と略す[2]）にはこれらが受け継がれ，OI円形刺突文は円・刺X期まで，横位隆起線文は円・刺V期まである。

〈文様割付〉文様の割付には，口縁部・頸部などの屈曲部を基線として器体を水平に区分する横位分割，口縁部突起を基線とする器体を垂直に区分する縦位分割がある。

横位分割のうち，文様帯が口縁部に偏る割付は，道南では青苗B式新まで，道央ではH37丘珠・古～H37栄町古まで，道東釧路ではフシココタン下層～下田ノ沢Ⅱ式まで，道東網走では栄浦第二・一群～宇津内ⅡaⅡ式まである。文様帯を口縁・頸部・胴部に三分割する割付は，道南では下添山～南川Ⅳ群までみられ，道央ではH37栄町期新～後北A式にみられる。文様帯を上半と下半に二分する割付は，道南では聖山KⅡ群以降にあり，道央では後北B式以降に，道東網走では宇津内ⅡbⅠ式以降にある。

縦位分割は，道南部では聖山KⅡ群[3]や後北式B～C_2・D式にみられ，道央部では江別太1式に出現し，後北C_2・D式までみられる。道東釧路では興津式に，道東網走では元町2式から存在する。また熊木の言う「2＋2単位」の文様割付は道東特有のもので，釧路では下田ノ沢Ⅰ式に，網走では宇津内ⅡaⅠ式から存在し，道央では後北A～B式に僅かに認められ［熊木俊朗1997・2000］，道南にはみられない。

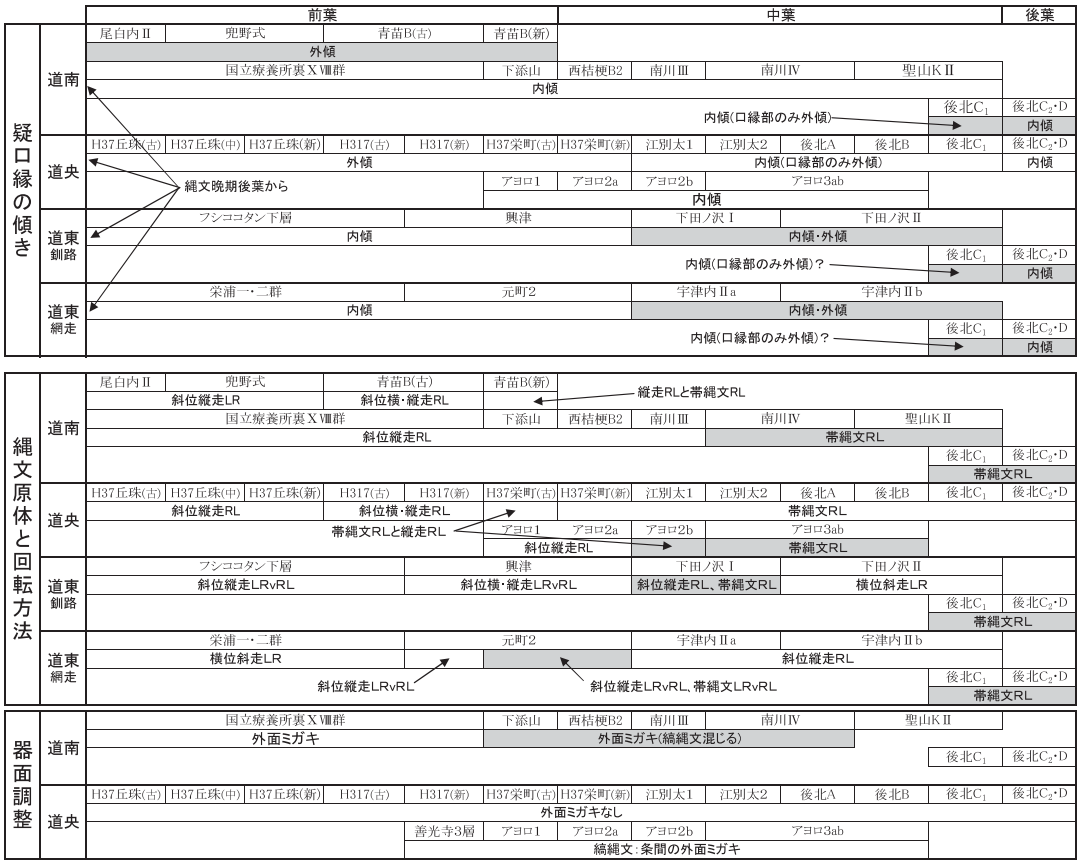
b．疑口縁の傾き・底部成形：内在的属性（表3）

〈前葉〉道南では，在地系の尾白内Ⅱ群・青苗B式が外傾接合［松田宏介ほか2003］，砂沢系の国立療養所裏遺跡XⅧ群が内傾接合である。道東北では内傾接合である。道央ではH37栄町まで外傾接合，道央日高から道東釧路にかけでは内外面側に接合面を持つ両傾接合が主体を占める［松田宏介2005・2006］。

〈中葉〉道南では恵山式が内傾接合。道央では江別太1式まで外傾接合で，江別太2～後北C_1式が内傾接合であるが，後北C_1式までは口縁端部の最終の積み上げのみが外傾接合するものが多い。この外傾接合は道南・七飯町聖山遺跡の後北式C_1式にも見られる［石本省三1979］。道東北では宇津内式・下田ノ沢式に内傾・外傾接合が見られる。道央日高では両傾接合が残る［松田宏介2005］。

底部を小径の高台状にする成形は，道南部では下添山～後北式C_1式，道央部では江別太1～後

表３　土器の内在・中間的属性



北式C_1式，道東網走では宇津内ⅡaⅡ～後北式C_1式，道東釧路では下田ノ沢Ⅰ～後北式C_1にみられる。なお，後北C_2・D式には底部は大径の平底になる。

〈後葉〉後北C_2・D式と円・刺土器は，後北A～C_1式にみられた口縁端部の最終積み上げの外傾接合はなくなり，倒円錐台形に休止期を設けず内傾接合で成形する。そのいっぽう，円・刺土器深鉢の中には胴部と頸部の境に段を設ける成形[(4)]が円・刺Ⅶ期以降出現し，坏の成形には内底面が丸底の「丸底つくり」と内底面が平底の「平底つくり」の２種類の成形が円・刺Ⅺ期以降に出現する［鈴木　信ほか 2007］。

ｃ．撚り・回転方行と器面調整：中間的属性（表３）

〈前葉〉道南では斜位縦走LR（兜野式）→斜位縦走・斜位横走RL（青苗Ｂ式古[(5)]）→斜位縦走RL（下添山式），斜位縦走RL・帯縄文RL（青苗Ｂ式新）である。道央では斜位縦走RL（Ｈ 37 丘珠）→斜位横走・斜位縦走RL（Ｈ 317）→帯縄文RL（Ｈ 37 栄町以降）である。道東では［熊木俊朗 1997・2000］，釧路の斜位縦走LR∨RL（フシココタン下層式）→斜位横走・斜位縦走LR∨RL（興津式）。網走の横位斜走LR（栄浦第二・一群の古～元町２式Ⅰ類）→斜位縦走LR∨RLと帯縄文LR∨RL（元町２式，中ノ島３群［北見市教育委員会 1978］元町２式Ⅱ類に類似）である。

〈中葉〉道南では斜位縦走RL（南川Ⅲ群）→帯縄文RL（南川Ⅳ群・聖山ＫⅡ群），道央では帯縄文RL（江別太２式・後北式Ａ～C_1式），道東釧路では斜位縦走RL・帯縄文RL（下田ノ沢Ⅰ式）→

横位斜走LR（下田ノ沢Ⅱ式），道東網走では斜位縦走RL（宇津内式）［熊木俊朗 1997・2000］。

外面最終調整については，道南の恵山式群に外面磨きがみられ南川Ⅳ群まで残る。条間を磨く縞縄文は道南では下添山式から，道南部東縁では善光寺３層式（青苗Ｂ式古に並行）に，道央ではアヨロ２ab式においてみられる。

〈後葉〉後北C_2・Ｄ式～円・刺Ⅲ期は帯縄文RL，まれに刷毛目様の集合沈線がある。円・刺Ⅳ期は帯縄文RLにRLが加わる。円・刺Ⅴ期はLRに変わり，RL∨LRをナデ消して帯縄文風にする例もある。外面最終調整は円・刺Ⅴ期まではナデ，箆ミガキはⅥ期に出現する。刷毛目は箆ミガキの下地であり，Ⅷ期から箆ミガキが疎らになり現れ始め，Ⅸ期以降に箆ミガキが胴部以下に限られるので頸部以上では刷毛目が最終調整となる。

ｄ．土器における属性の傾向

〈表出的属性〉文様要素については，前葉～中葉にかけて道南で発生した要素は粘土粒・沈線区画の磨消縄文，道央で発生した要素は突瘤文・爪形刺突列点文・微隆起線文，道東北で発生した要素はボタン状貼付文・吊り耳・疑縄貼付文である。これらのうち隣接地域を越えて時系的に広がった要素には突瘤文・微隆起線文・縦列の菱形文がある。縦列の菱形文は道南の西桔梗B_2・アヨロ２a式においては磨消縄文，道央の江別太１・２式においては沈線文，後北Ａ式においては疑縄貼付文，後北式C_1式においては微隆起線文，道東釧路の下田ノ沢Ⅱ式において貼付文，と各地において多少変異しながら採用される。そのほか，龍門寺式の文様要素が南川Ⅲ群に取り入れられ，南川Ⅲ群の橋状把手が龍門寺式に採用されていることから，東北南部いわき地方と道南の属性交換があるという指摘もある［設楽博己 2003］。後北C_2・Ｄ式「新」に出現した円形刺突文は，道南・道央・道東では中葉後半に廃れる要素であることから，道北部の鈴谷式の影響と考えられ，並行関係から熊木分類のタイプＡ２鈴谷式［熊木俊朗 2004］があてられる。円形・刺突文土器群の文様要素と東北北部の沈線文土師器の文様要素は類似する。ただし，沈線文土師器の文様要素の出現時期は円形・刺突文土器群よりも遅れるので円形・刺突文土器群の影響と考えられている［宇部則保 2000］。

文様割付については，文様帯が口縁部に偏る横位分割は縄文晩期後葉以降に北海道全域の在地系（非大洞系）にある。横位三分割（頸部文様帯の創出）は道南特有であり道央にも波及し，横位二分割（上半部文様帯の創出）を道央で出現させる。縦位分割は，道東からの影響で江別太１～後北C_2・Ｄ式まで盛行し，道南では道央からの影響で後北式Ｂ式並行の聖山ＫⅡ群に現れて後北式C_1式以降に盛行する。「２＋２単位」の縦位分割は道央の一部に影響を与える。後北C_2・Ｄ式には道央以西と道東に地域差があり，道東では円形刺突文が斉一的に現れるが道央では選択的に現れ［熊木俊朗 2002］，道東では口縁の平縁化・縦位分割が道央以西に比べて早く廃れる。また，道央以西で多出する上半横位帯縄文＋下半縦位帯縄文を組み合わせる後北Ｄ式は道東では多出しない。これは後北式Ａ～C_1式にみられる上半部文様帯に施される下地横位帯縄文の残存要素と考えれば後北式群の発生地である道央に多くあることが整合的に理解できる。そうであれば，後北C_2・Ｄ式の初期にも存在する可能性があり，「帯縄文系」後北式［大坂　拓 2007］の後継にあたる可能性もある。(6)

〈内在的属性〉疑口縁の傾きについては，道南では在地系が外傾で，大洞・砂沢系が内傾で恵山式はそれを受け継ぐ。道央では縄文晩期後葉後半に外傾が始まり，江別太２式期に恵山式からの影響で内傾へと交替するが，後北式C_1式まで口縁部に外傾接合が残存する。道東では内傾が縄文晩

期後葉以降継続するが，前葉末には道央からの影響で外傾が混じる。なお，道央日高から道東釧路にかけては中葉まで両傾が若干残る。

深鉢底部を高台状にする成形は，前葉～中葉にかけて道南から道央へ，ついで道東へ広まることから恵山式の成形技術が拡散したといえる。

頸部の段は東北南部の住社～栗囲式甕（胴部と頸部の境の段，胴部下半の接合面の段・ケズリ，これらは休止期や分割成形を伺わせる痕跡）に由来する。栗囲式期にこの技法[7]が東北北部の深鉢に導入されて宇部分類の甕Ａ［宇部則保 2005］が発生した。また，東北北部には住社～栗囲式甕そのものである宇部分類甕Ｂもある。坏の成形は，「丸底つくり」は住社～栗囲式に備わる技法である。いっぽう，「平底つくり」は東北北部で６世紀後半～７世紀前葉に出現し，住社～栗囲式の甕（東北北部では宇部分類甕Ｂ）・坏や須恵器と内底面の形態に類似がないことから，甕化した深鉢の底部成形の系統上にあると考えられる。甕Ａ・「丸底つくり」の坏・「平底つくり」の坏は，円形・刺突文土器群の中にある異系統の成形技法であり，現在までのところ八戸地域に類似がみられるので，ここからの系譜が求められる［鈴木　信ほか 2007］（図３）。

〈中間的属性〉撚り・回転方向については，縄文晩期後葉後半の道南・道東北では横位斜走LR，道央では斜位縦走RLが盛行する。前葉には道央の撚り・回転方向が広まり，道南では斜位縦走RLに交替する。道東では道央の撚り・回転方向のほか，道央の回転方向と前代の撚りの組み合わせ，前代の回転方向と撚りが残る。

帯縄文については，道南の青苗Ｂ式新と道央の道央H 37 栄町期古と道東網走の中ノ島３群（元町２式Ⅱ類並行期）においてほぼ同時に発生する。なお，「帯縄文系興津式」［熊木俊朗 2000］にも発生するという。これは道東網走に分布し，器形・文様要素が元町２式Ⅱ類に類似するので，興津式に含めることを保留[8]し，この考察から外す。

帯縄文が道南の青苗Ｂ式・新で創出されたとすると，同地域の恵山式に継承されず，しばらく後の南川Ⅳ群期になって汎用されたことになる。道東では類例が極めて少なく，道東釧路では下田ノ沢Ⅱ式で廃れ，道東網走では中ノ島３群の一部でしか採用されない。これら整合させると帯縄文は

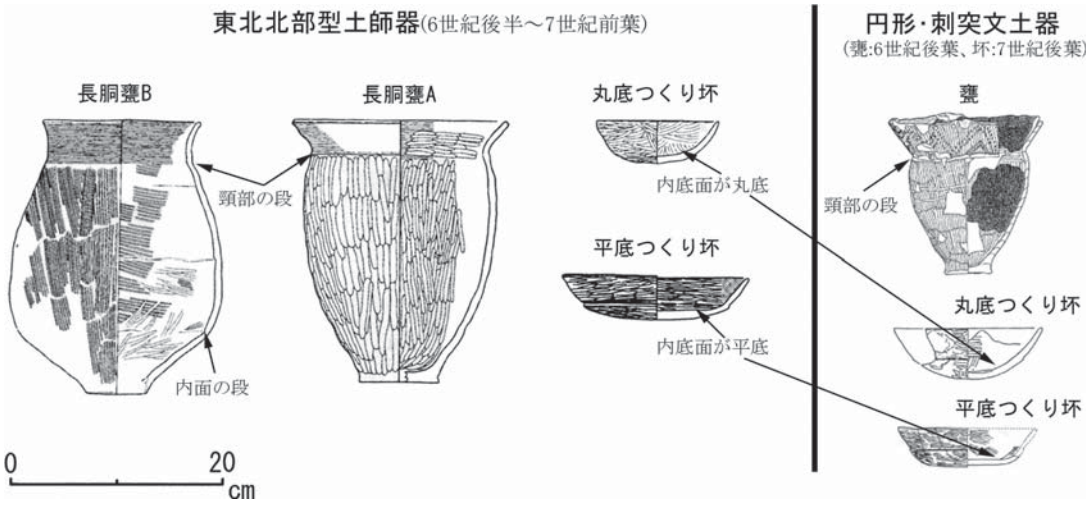


図３　東北北部型土師器と円形･刺突文土器の成形

道央で自発した可能性が高い。

善光寺3層式（道南の青苗B式古，道央のH317期新に並行）の縞縄文の発生は，外面調整にミガキを多用する道南の恵山式に連らなる技法と考えられる。

外面の磨きについては，道南の恵山式が道南部東縁の縞縄文と道央のアヨロ2ab式に影響を与えるものの道東には拡がらない。反対に，道央の後北式の拡散によって道南の聖山KⅡ群以降には器面の磨きが廃れ始める可能性がある。また，後葉における最終器面調整のうち，ナデは縄文時代以来の技法であり，箆ミガキは刷毛目より早く出現する。東北北部では刷毛目は円・刺Ⅴ期には出現しており（八戸市田向冷水遺跡），箆ミガキは遅れて円・刺Ⅶ・Ⅷ期に出現し，これは円形・刺突文土器群の影響と考えられている［宇部則保2007］。

⑵　石器（図4，表4）

a．石器形態の変化：表出的属性

〈石鏃〉地域差・時系変化が見られる［内山真澄1998］。二等辺三角形凹基鏃は晩期後葉に道東で出現して道央まで広がり，道東では後北C_1式期，道央では後北A式期まで残る。二等辺三角形有茎鏃は晩期中葉に道南で出現して後北C_2・D式期「古～中」まで残り，道央には江別太1～後北A式期にみられる。二等辺三角形平基鏃は道央江別太1式期に発生し，道東では宇津内Ⅱb式期（後北A並行），道南ではアヨロ3b式期・後北B並行の聖山KⅡ群期に定着する。そして，二等辺三角形平基鏃は後北C_1式期に長幅比2：1以上の狭長になり，後北C_2・D式期「新」には両側縁と基部が凸縁気味の滴形に変わる。なお，二等辺三角形平基鏃は後北C_2・D式期「古～中」までは丁寧な調整で素材面がほとんど残らないが，後北C_2・D式期「新」の道央以西では周縁調整が主で素材面が残る滴形が多く，道東では丁寧な調整で素材面が少ない狭長滴形が多い。

〈ナイフ状石器〉道央部では広身柳葉形の槍形が多く少例靴形があり，道南部では靴形が主体で南川Ⅳ群期まである。道東では広身柳葉形の槍形で，後北C_1式期になると少例靴形が混在する。また，後北C_2・D式期以降は槍形が残り小型化・粗雑な調整となる。

〈小型円形掻器〉後北C_2・D式期までは剥片素材が多く，石核素材が少量あり，器厚が薄いものが多い。円・刺Ⅰ期以降になると小転礫の石核素材が多く，器厚が厚い。

〈石斧〉石斧の形態は厚手・片刃が多く，次いで扁平片刃・両刃，斎野分類Ⅲ［斎野裕彦1998］の柱状片刃があり地域ごとの違いはない。擦切り技法は，道東では宇津内Ⅱa，道南では南川Ⅳ群期，道央では後北A式期まで副葬品として事例がある。

b．素材剥離の変化:内在的属性

〈素材剥離〉続縄文初頭～後北C_2・D式期では，割礫を原石とした並列剥離，両極剥離した転礫を並列剥離または求心的剥離，小転礫を両極剥離する操作が北海道全域にみられる。また，後北C_2・D式「新」の道央以西では石鏃の形態小変より素材の小型化・扁平化が類推でき，その素材を得る操作は両極剥離である可能性が高い。円・刺Ⅰ期以降には北海道全域において両極剥離した転礫を並列剥離または求心的剥離，小転礫を両極剥離する操作が殆どとなり，転礫を原石とした並列剥離が少数残る［高倉　純2006，鈴木　信2008］。

c．石器石材組成の変化：中間的属性

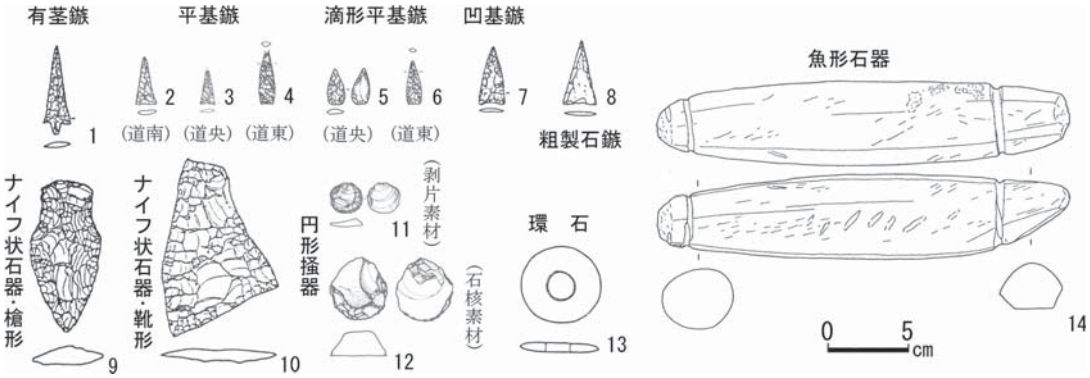


図 4　言及した主な石器類

表 4　石器類の表出・中間的属性，消長

		前葉						中葉						後葉	
石鏃形態	道南	尾白内Ⅱ	兜野式		青苗B(古)		青苗B(新)								
		国立療養所裏Ⅹ層群					下添山	西桔梗B2	南川Ⅲ	南川Ⅳ		聖山KⅡ			
		二等辺三角形有茎										?			
														後北C_1	後北C_2・D
														二等辺三角形平基	
	道央	H37丘珠(古)	H37丘珠(中)	H37丘珠(新)	H317(古)	H317(新)	H37栄町(古)	H37栄町(新)	江別太1	江別太2	後北A	後北B	後北C_1	後北C_2・D	
		二等辺三角形凹基										二等辺三角形平基			
		凹基と平基が混じる					アヨロ1	アヨロ2a	アヨロ2b	アヨロ3ab					
							二等辺三角形有茎								
	道東	フシココタン下層				興津			下田ノ沢Ⅰ		下田ノ沢Ⅱ				
		栄浦一・二群				元町2			宇津内Ⅱa		宇津内Ⅱb				
		二等辺三角形凹基													
		凹基と平基が混じる											後北C_1	後北C_2・D	
													二等辺三角形平基		
剥片石器石材	道南	尾白内Ⅱ	兜野式		青苗B(古)		青苗B(新)								
		国立療養所裏Ⅹ層群					下添山	西桔梗B2	南川Ⅲ	南川Ⅳ		聖山KⅡ			
		頁岩多用													
		頁岩多用(黒曜石も)											後北C_1	後北C_2・D	
													黒曜石多用		
	道央	H37丘珠(古)	H37丘珠(中)	H37丘珠(新)	H317(古)	H317(新)	H37栄町(古)	H37栄町(新)	江別太1	江別太2	後北A	後北B	後北C_1	後北C_2・D	
							アヨロ1	アヨロ2a	アヨロ2b	アヨロ3ab					
		黒曜石と頁岩を用いる													黒曜石多用
	道東	フシココタン下層				興津			下田ノ沢Ⅰ		下田ノ沢Ⅱ				
		栄浦一・二群				元町2			宇津内Ⅱa		宇津内Ⅱb				
													後北C_1	後北C_2・D	
		黒曜石多用													
玉類	道南	尾白内Ⅱ	兜野式		青苗B(古)		青苗B(新)								
		国立療養所裏Ⅹ層群					下添山	西桔梗B2	南川Ⅲ	南川Ⅳ		聖山KⅡ			
						管玉						管玉例数減少			
								環石							
													後北C_1	後北C_2・D	
													?	ガラス小玉	
	道央	H37丘珠(古)	H37丘珠(中)	H37丘珠(新)	H317(古)	H317(新)	H37栄町(古)	H37栄町(新)	江別太1	江別太2	後北A	後北B	後北C_2	後北$C_{3\cdot D}$	
							アヨロ1	アヨロ2a	アヨロ2b	アヨロ3ab					
		琥珀玉多用							琥珀玉寡用						
							環石								
						管玉				管玉寡用					
													ガラス小玉		
	道東	フシココタン下層				興津			下田ノ沢Ⅰ		下田ノ沢Ⅱ				
		栄浦一・二群				元町2			宇津内Ⅱa		宇津内Ⅱb				
		イノシシ牙装飾品													
		琥珀玉多用											例数減少		
						環石									
											管玉寡用				
													後北C_1	後北C_2・D	
													ガラス小玉		
魚形石器	道南	尾白内Ⅱ	兜野式		青苗B(古)		青苗B(新)								
		国立療養所裏Ⅹ層群					下添山	西桔梗B2	南川Ⅲ	南川Ⅳ		聖山KⅡ			
							あり					?			
													後北C_1	後北C_2・D	
													なし		
	道央	H37丘珠(古)	H37丘珠(中)	H37丘珠(新)	H317(古)	H317(新)	H37栄町(古)	H37栄町(新)	江別太1	江別太2	後北A	後北B	後北C_1	後北C_2・D	
							あり				なし				
							アヨロ1	アヨロ2a	アヨロ2b	アヨロ3ab					
							あり					?			
	道東	フシココタン下層				興津			下田ノ沢Ⅰ		下田ノ沢Ⅱ				
		栄浦一・二群				元町2			宇津内Ⅱa		宇津内Ⅱb				
						なし									
													後北C_1	後北C_2・D	
													なし		

〈石器石材組成〉道東では，後北C_1式期まで一貫して，石鏃・ナイフ状石器・小型円形掻器・石錐・楔形石器には黒曜石が用いられる。道央では道東とほぼ同じであるがナイフ状石器・掻器・石錐に頁岩製が認められ，江別太１～後北C_2・Ｄ式期にかけて片岩・粘板岩製の二等辺三角形平基の「粗製石鏃」［松田宏介2007］もある。道南では縄文晩期以来の頁岩多用の傾向が続くが，後北Ｂ式並行の聖山ＫⅡ群期になると石鏃・小型円形掻器には黒曜石を用い始め，粗製石鏃も出土する。後北C_2・Ｄ式期の松前町白坂遺跡第４地点・第１・２ブロックでは殆どが頁岩であるが，函館市石倉貝塚の土坑墓P 19では石鏃は黒曜石であり，後北C_2・Ｄ式期には黒曜石の使用が拡がる。

石斧は全地域において神居古潭渓谷産・額平川流域産の青色片岩・緑色片岩が多用される。魚形石器は粘板岩・泥岩・凝灰岩がもちいられ，石斧とは異なる選択をしていた［千代　肇1988］。

ｄ．石器における属性の傾向

〈表出的属性〉道央では，続縄文初頭に道東の影響を受けて二等辺三角形凹基鏃がみられ，江別太１期に道南の影響を受けて魚形石器・二等辺三角形有茎鏃がみられる。道南では後北Ｂ式並行の聖山ＫⅡ群～後北C_1式期にかけて道央の影響を受けて二等辺三角形平基鏃・粗製石鏃がみられる。道東では後北Ａ～後北C_1式期に道央の影響を受けて二等辺三角形平基鏃・靴形のナイフ状石器がみられる。

〈内在的属性〉前葉～後北C_2・Ｄ式期までは多様な原石形態・剥離操作が見られるが，円・刺Ⅰ期以降には石材選択と連携した原石形態・剥離操作の斉一化が北海道全域において並行的に生じる。

〈中間的属性〉道央以東の黒曜石多用と道南の頁岩多用傾向が続縄文初頭～後北C_2・Ｄ式期まで続いた。円・刺Ⅰ期以降は道南においても小型円形掻器・楔形石器に黒曜石が多用され頁岩利用が低減し，原石形態・剥離操作と連携した石材の斉一化がみられる。石斧石材は地域ごとの変化は起こらず円・刺Ⅰ期に廃用される。

⑶　金属器（図５，表５）

ａ．器種組成の変化：表出的属性

出土例はほとんどが墓出土の副葬品であり，出土地点は道央・道東にかたよるものの，これら地域間に組成の違いは見当たらない。後北Ｂ式期までは鉄鏃・刀子などの小型の鉄製品が極わずかに出土し，後北C_1式期には板状鉄斧が加わりⅥ期まで出土例がある。続く後北C_2・Ｄ式期には鉈が，円・刺Ⅰ～Ⅲ期に袋状鉄斧が，円・刺Ⅳ期に鎌が加わる。円・刺Ⅶ期には大刀・横刀が，円・刺Ⅷ期には攝子が加わる。東北地方北部では鎌が後北C_2・Ｄ式期並行期に，鉄鏃が円・刺Ⅰ～Ⅴ期並行期に副葬されており北海道よりも早い。

大刀・横刀については，木芯円頭大刀・長筒形方頭大刀は円・刺Ⅸ～Ⅹ期にある。鐶付足金物が付く大刀は円・刺Ⅸ～Ⅺ期にあり，同類は東北北部にない。短筒形方頭横刀・圭頭に似る短筒形方頭横刀は円・刺Ⅹ期にあり，同類（八木の「北の方頭大刀」）は東北北部に偏在する［八木光則2003，鈴木　信2005ａ］。

鉄鏃は出土量が少ないものの柳葉形鏃の器種が多い。無柄柳葉形鏃・輪関長頸腸抉柳葉形鏃・棘関腸抉柳葉形鏃・棘関長頸腸抉柳葉形鏃があり，無柄柳葉形鏃と長頸腸抉柳葉形鏃の組み合わせは円・刺Ⅸ期～八世紀中葉まで，長頸柳葉形鏃が円・刺Ⅷ～Ⅹ期がある。そのほかには三角形鏃・Ｙ

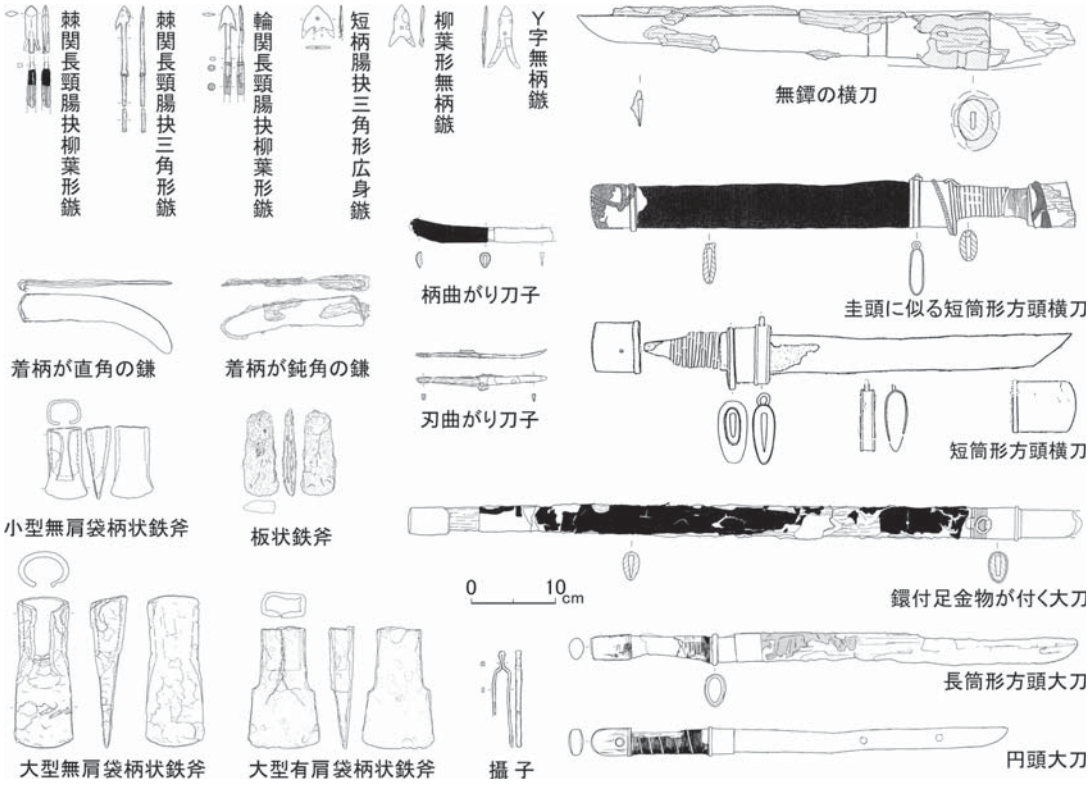


図5　言及した主な金属器

表5　石器と金属器の消長

渡海交易の段階	時期（道央の土器型式で代表した）		狩猟具				加工具										土工・農具		その他			器種不明
			石槍	石鏃	鉄鏃	魚突き鉤	ナイフ状石器	石錐	掻器など	楔形石器	刀子	鉋	錐・針	石斧	板状鉄斧	袋状鉄斧	鉄鎌	鍬先	大刀・横刀	攝子	紡錘車	
Ⅰ	続縄文・前葉	H 37 丘珠～H 37 栄町古	▲	▲			▲	▲	▲	▲				▲								●
	続縄文・中葉	H 37 栄町新～後北B式	▲	▲	●		▲	▲	▲	▲	●			▲								●
Ⅱa		後北C_1式		▲			▲	▲	▲	▲	●			▲	●							
Ⅱb	続縄文・後葉	後北C_2・D式		▲			▲	▲	▲	▲	●	●		▲	●							●
Ⅲ前半		円形刺突文土器群期Ⅰ～Ⅲ							▲	▲	●					●						●
		円形刺突文土器群期Ⅳ・Ⅴ							▲	▲	●				●							●
Ⅲ後半		円形刺突文土器群期Ⅵ～Ⅷ			●				▲	▲	●	●	●			●	●		●	●		
／Ⅳ		円形刺突文土器群期Ⅸ～ⅩⅠ			●				▲	▲	●		●			●	●		●	●		●
	擦文・前期	8世紀代			●				▲	▲	●	●	●			●	●	●	●	●		●
Ⅴ	擦文・中期以降	9世紀以降			●	●				▲	●		●			●	●	●	●		●	●

●は鉄器，▲は石器。網掛けは存在が予想されることを示す。

字形鏃があり，棘関長頸腸抉三角形鏃は円・刺Ⅶ～Ⅹ期，長頸三角形鏃は円・刺Ⅸ～Ⅹ期，短柄腸抉三角形鏃広身は円・刺Ⅶ～Ⅹ期，無柄Y字形鏃は円・刺Ⅶ～Ⅺ期にある［山内敏行 2003，鈴木

信 2006]。

2．遺構における属性転移

⑴　墓制（図6，表6・7）

a．外部付属施設：表出的属性

〈配石〉墓坑直上を覆う外部施設として配石があり，前葉～後葉を通じて全道で広くみられ，道南・道央・道東ごとの特色はない。

〈柱穴様土坑〉柱穴様土坑は上屋を支持すると推定される付属遺構である。柱穴様土坑には平面が円形・断面が杭状，平面が楕円形・断面が土坑状の形態があり，その配置は，墓坑底長軸上の両端にある2本柱（以下，「長軸上2本配置」），墓坑底四隅に4本柱（以下，「四隅4本配置」），四隅4本配置の類型である「四隅突出4本配置」や「楕円形土坑状柱穴＋四隅4本配置」構造がみられる［鈴木　信 2005 b］。

道央では，在地系土器が副葬される墓（以下「在地系」）において，長軸上2本配置の初例が江別市七丁目沢6遺跡（縄文晩期後葉，大洞A′並行期）にあり，四隅4本配置はH 37栄町期に恵山式土器が副葬される墓（以下「恵山系」）に出現する。長軸上2本配置は円・刺Ⅵ期以降に激減し，「四隅4本配置」がほとんどとなる。

道東では，四隅4本配置の初例が釧路市幣舞遺跡・貝塚町1丁目遺跡（縄文晩期後葉，大洞A′並行期）にあり，道東釧路ではフシココタン下層～興津式，道東網走ではやや遅れて元町2～宇津

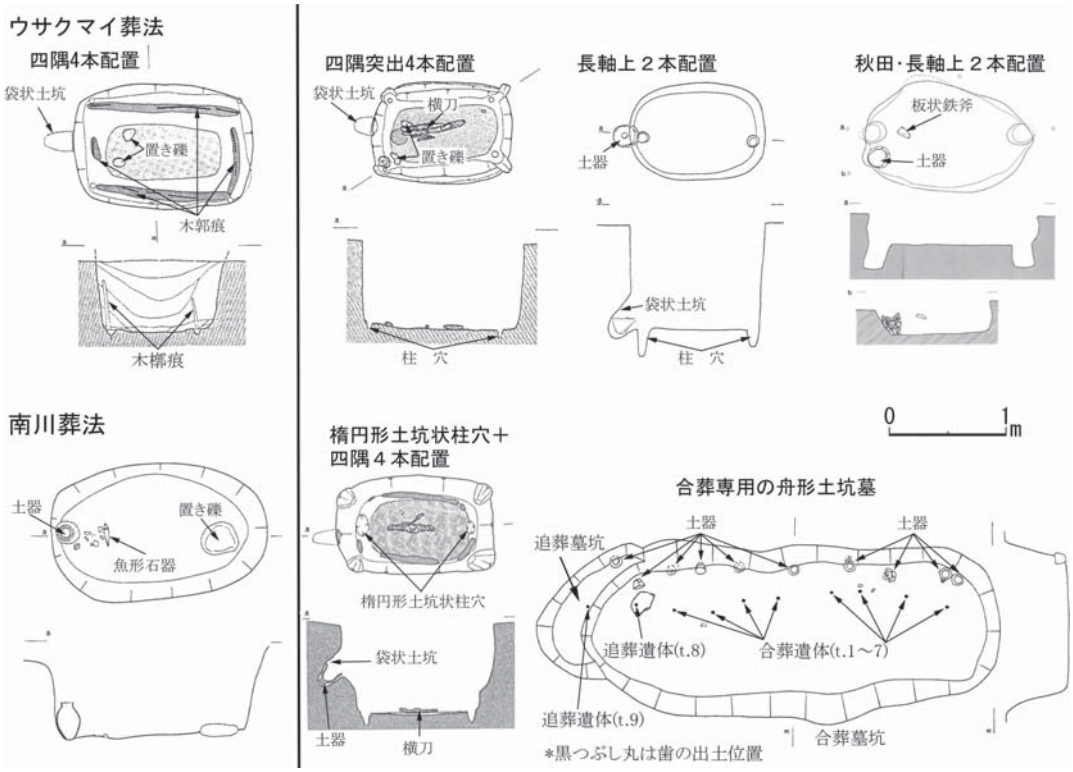


図6　葬法・墓制の属性

表 6　墓制の表出・内在的属性

		前葉											中葉						後葉
柱穴様土坑	道南	尾白内Ⅱ		兜野式		青苗B(古)		青苗B(新)											
		国立療養所裏Ⅹ Ⅷ群						下添山	西桔梗B_2	南川Ⅲ	南川Ⅳ	聖山KⅡ							
		柱穴なし？																	
																	後北C_1	後北C_2・D	
																	？	四隅4本	
	道央	H37丘珠(古)	H37丘珠(中)	H37丘珠(新)	H317(古)	H317(新)	H37栄町(古)	H37栄町(新)	江別太1	江別太2	後北A	後北B	後北C_1	後北C_2・D					
		長軸2本					長軸2本・四隅4本												
		縄文晩期後葉から					アヨロ1	アヨロ2a	アヨロ2b	アヨロ3ab									
							四隅4本												
	道東釧路	フシココタン下層				興津			下田ノ沢Ⅰ		下田ノ沢Ⅱ								
		四隅4本							？										
		縄文晩期後葉から											後北C_1	後北C_2・D					
													？						
	道東網走	栄浦一・二群				元町2			宇津内Ⅱa		宇津内Ⅱb								
		？				四隅4本(類例少ない)					？								
													後北C_1	後北C_2・D					
													？						
埋葬姿勢	道南	尾白内Ⅱ		兜野式		青苗B(古)		青苗B(新)											
		？																	
		国立療養所裏Ⅹ Ⅷ群						下添山	西桔梗B_2	南川Ⅲ	南川Ⅳ	聖山KⅡ							
		？							側臥屈葬・屈葬			？							
																	後北C_1	後北C_2・D	
																	？		
	道央	H37丘珠(古)	H37丘珠(中)	H37丘珠(新)	H317(古)	H317(新)	H37栄町(古)	H37栄町(新)	江別太1	江別太2	後北A	後北B	後北C_1	後北C_2・D					
		？			側臥屈葬・屈葬				側臥屈葬										
							アヨロ1	アヨロ2a	アヨロ2b	アヨロ3ab									
							側臥屈葬・屈葬		側臥屈葬										
	道東釧路	フシココタン下層				興津			下田ノ沢Ⅰ		下田ノ沢Ⅱ								
		座葬・側臥屈葬・屈葬							側臥屈葬・屈葬										
													後北C_1	後北C_2・D					
													？						
	道東網走	栄浦一・二群				元町2			宇津内Ⅱa		宇津内Ⅱb								
		側臥屈葬・屈葬																	
													後北C_1	後北C_2・D					
													側臥屈葬・屈葬	側臥屈葬					
墓坑平面形	道南	尾白内Ⅱ		兜野式		青苗B(古)		青苗B(新)											
		？																	
		国立療養所裏Ⅹ Ⅷ群						下添山式	西桔梗B_2	南川Ⅲ	南川Ⅳ	聖山KⅡ							
		？							楕円・円		楕円・小判		？						
													後北C_1	後北C_2・D					
													？	楕円・小判					
	道央	H37丘珠(古)	H37丘珠(中)	H37丘珠(新)	H317(古)	H317(新)	H37栄町(古)	H37栄町(新)	江別太1	江別太2	後北A	後北B	後北C_1	後北C_2・D					
		楕円＜円形					楕円＞円			楕円＜円＋隅丸方									
							アヨロ1	アヨロ2a	アヨロ2b	アヨロ3ab									
							楕円＜円＋隅丸方			？									
	道東釧路	フシココタン下層				興津			下田ノ沢Ⅰ		下田ノ沢Ⅱ								
		？				円＜隅丸方			？										
													後北C_1	後北C_2・D					
													楕円＞小判	？					
	道東網走	栄浦一・二群				元町2			宇津内Ⅱa		宇津内Ⅱb								
		楕円＞小判				楕円＞円			楕円＜小判		楕円＞円								
													後北C_1	後北C_2・D					
													楕円・円	楕円＜小判					
袋状土坑	道南	尾白内Ⅱ		兜野式		青苗B(古)		青苗B(新)											
		国立療養所裏Ⅹ Ⅷ群						下添山式	西桔梗B_2	南川Ⅲ	南川Ⅳ	聖山KⅡ							
		なし																	
													後北C_1	後北C_2・D					
													？						
	道央	H37丘珠(古)	H37丘珠(中)	H37丘珠(新)	H317(古)	H317(新)	H37栄町(古)	H37栄町(新)	江別太1	江別太2	後北A	後北B	後北C_1	後北C_2・D					
									壁面ヨコ	壁面と坑底の境にタテ									
							アヨロ1	アヨロ2a	アヨロ2b	アヨロ3ab									
								壁面ヨコ＞坑底タテ											
	道東	フシココタン下層				興津			下田ノ沢Ⅰ		下田ノ沢Ⅱ								
		栄浦一・二群				元町2			宇津内Ⅱa		宇津内Ⅱb								
		なし																	
													後北C_1	後北C_2・D					
													？	境にタテ					
置き礫	道南	尾白内Ⅱ		兜野式		青苗B(古)		青苗B(新)											
		国立療養所裏Ⅹ Ⅷ群						下添山	西桔梗B_2	南川Ⅲ	南川Ⅳ	聖山KⅡ							
										あり			？						
													後北C_1	後北C_2・D					
													なし？						
	道央	H37丘珠(古)	H37丘珠(中)	H37丘珠(新)	H317(古)	H317(新)	H37栄町(古)	H37栄町(新)	江別太1	江別太2	後北A	後北B	後北C_1	後北C_2・D					
									あり				なし？						
							アヨロ1	アヨロ2a	アヨロ2b	アヨロ3ab									
							あり												
	道東	フシココタン下層				興津			下田ノ沢Ⅰ		下田ノ沢Ⅱ								
		栄浦一・二群				元町2			宇津内Ⅱa		宇津内Ⅱb								
		なし																	
													後北C_1	後北C_2・D					
													なし						

内Ⅱa式に極少数みられるが，後北C_1～後北C_2・D式期になるとみられない。なお，道東では長軸上2本配置は見られない。

道南における類例は，後北C_2・D式期の四隅4本配置が函館市桔梗E_2遺跡に1例あるのみで，おそらくは道央を介してこの配置が採用されたと思われる。

b．内部施設・埋葬姿勢：内在的属性

〈主体部構造〉前葉～後葉における主体部構造は各地域とも主に土坑で，ほかには木槨痕跡や遺体梱包・敷物痕跡・埋甕がある。また道東釧路では興津式期に壁面を遺体頭部収納のため横穴を掘りこみ，竪穴と組み合わせて長軸断面がL字になる形態がみられる。

〈埋葬姿勢〉前葉～8世紀中葉を通じて主な埋葬姿勢は側臥屈葬であるが，道東釧路では縄文晩期後葉～興津式期にかけて座葬が見られる。

〈坑底平面形[9]〉坑底平面形については，道南では縄文晩期後葉には隅丸長方・小判・楕円形がみられ，兜野～下添山式期までは不明で，西桔梗B_2～南川Ⅲ群期にかけては楕円・円形が多く，南川Ⅳ群期には楕円・小判形が多く円形は少ない。後北C_2・D式期は円形・楕円形が主要である。

道央では，在地系ではH37丘珠～後北C_1式期を通じて，円・楕円形が主体を占め，隅丸方形は江別太2式期に出現する。恵山系ではアヨロ1～3b式期を通じて，円・楕円形が主体を占め，隅丸方形がある。後北C_2・D～円・刺Ⅴ期までは円形・楕円形が主要で，円・刺Ⅵ期以降は主要な形態が隅丸方形に入れ替わる。また，後北C_2・D式期には合葬専用の舟形土坑が現れる。

道東では縄文晩期後葉～興津式・元町2式までは円・楕円・小判・隅丸方形がみられ，宇津内Ⅱab式と下田ノ沢Ⅰ・Ⅱと後北C_1式期には円・楕円・小判形が多く，縄文晩期後葉～後北C_1式期の釧路では網走に比べ隅丸方形が多い。合葬専用の舟形土坑は後北C_1式期に十勝地方（道央と道東釧路の中間，本稿では道東釧路に含める）の十勝太若月遺跡に初出する。後北C_2・D式期は釧路では不明で，網走では小判・楕円形が主要である。

〈埋甕葬〉埋甕葬は晩期後葉以降に道南・道央・道東の各地で少数例ある。道南では南川Ⅳ群期，道央では江別太2式期，道東では宇津内Ⅱa式期までみられる。これらは1土坑に複数の埋甕を設置するのではなく，1土坑に1個の甕または壷を正立または倒立して埋める例がほとんどである。瀬棚南川遺跡の3号・4号埋設土器や岐阜第二遺跡のF4区埋甕には新生児または胎児が埋葬されていたと推定されることから，再葬の二次葬として土器を用いたのではなく幼児の一次葬容器として用いられた可能性が高い。

c．内部付属施設：内在的属性

〈袋状土坑〉これは墓坑壁面に水平・斜めに設けられた供献用小坑で，墓坑長軸側や遺体頭側に設けられる。道央ではアヨロ2a式期に道央恵山系で発生し，江別太1式期に道央在地系に伝わる。恵山系では壁面に横方向に掘削され，在地系では江別太2式以降になると長軸右側[10]の壁面と坑底の境に下方に掘削される例が出現する。後者の掘削位置と方向は後北C_2・D式期に盛行し，円・刺Ⅴ期まで続く。円・刺Ⅵ期以降には墓坑長軸上の壁面を斜め下方向に掘削する施工が主要となる。また，袋状土坑は道南に類例がなく（七飯町桜町遺跡P211例にはその可能性がある），道東網走には道央と同じ掘削施工が後北C_2・D式期に出現する。

〈置き礫〉坑底に置かれる礫であり，南川葬法（頭側に供献土器，足側に1個の礫を置く葬法）

とウサクマイ葬法（頭側に袋状土坑，頭部両側に１対の礫を置く葬法）の１要素である。南川葬法の置き礫は，道央恵山系においてアヨロ１式期に発生しアヨロ３a式期まで，道央在地系は恵山系に遅れて江別太１式に採用され後北Ｂ式期まで残る。道南では道央恵山系に遅れて南川Ⅲ群期にあらわれ，南川Ⅳ群期に盛行し，後北Ｂ式期まで残る。ウサクマイ葬法の置き礫は，道央の円・刺Ⅵ期に発生し８世紀中葉まであり，道南・道東にない。

ｄ．副葬品：中間的属性

〈前葉～中葉の組成〉道南では南川Ⅲ～Ⅳ群期には石鏃・石槍・ナイフ・石錐・石斧と深鉢小・深鉢袖珍または壷袖珍・壷中と組合う場合が多い。碧玉管玉・器種不明鉄製品は下添山式以降に（森町尾白内貝塚）ある。なお，聖山ＫⅡ群期前半に後北Ｂ式土器を副葬した墓（八雲町栄浜１遺跡P-20，森町鷲ノ木遺跡UP１）が出現する。

道央では石鏃・石斧・深鉢小・深鉢袖珍・壷・玉類が組合わさる。玉類は石鏃と強い相関があるいっぽう，石鏃と組合わない場合には深鉢小・深鉢袖珍と組合わさる。深鉢大・深鉢中・鉢中は剥片石器とほとんど組合わない。琥珀平玉はH 37 丘珠期に，碧玉管玉はH 37 栄町期に加わる。鉄製品は紅葉山 33 号遺跡GP-1（アヨロ２a式期）・GP-5（アヨロ２b式期）から無茎鉄鏃が出土している以外は器種不明である。

道東釧路ではフシココタン下層～興津式期に深鉢袖珍と壷袖珍と琥珀平玉・猪牙装飾品が組み合わさる。道東網走では栄浦第二・一群～元町２式期に深鉢袖珍と壷袖珍と石鏃・ナイフ・石斧，宇津内Ⅱa式期には琥珀平玉が加わる。宇津内Ⅱｂ１～Ⅱｂ２・後北C_1式期に深鉢袖珍と石鏃・ナイフ・石斧が組み合わさる。宇津内Ⅱｂ１式期には碧玉管玉，宇津内Ⅱｂ２・後北C_1式期にはガラス小玉・板状鉄斧・刀子が加わる。なお，網走では宇津内Ⅱｂ１式期に後北Ａ式土器や後北Ｂ式土器を副葬した墓（北見市常呂河口遺跡P-44 a，P-327，P-306，P-89）が出現し，次期には後北C_1式を副葬した例が急増する。

〈後葉の組成〉後北C_2・Ｄ式期に頻出するのは石鏃・掻器・石斧・琥珀玉・土器で，ガラス小玉・滑石小玉も副葬される。後北C_2・Ｄ式期に碧玉管玉はなくなり，琥珀玉・土製管玉は円・刺Ⅰ期以降みられない。円・刺Ⅰ～Ⅴ期を通じて頻出するのは掻器・剥片・土器で，ガラス小玉・滑石平玉も副葬される。円・刺Ⅵ～Ⅷ期を通じて頻出するのは刀子・鉄斧・横刀・深鉢・鉢であり，石器類・玉類の副葬はほとんどない。円・刺Ⅸ～Ⅺ期を通じて頻出するのは横刀・刀子・耳鐶・深鉢である。土器は，後北C_2・Ｄ～円・刺Ⅴ期には注口・片口付き鉢・浅鉢の小・袖珍などの特殊な器形が盛行し，円・刺Ⅵ期以降は深鉢・鉢の小・袖珍が多く，注口・片口が付く器形は減少する。

〈琥珀玉と碧玉管玉〉道央部以西では碧玉管玉，道東では琥珀玉が排他的に分布し［青野友哉 1999］，墓坑内供伴例も道央ではアヨロ２a期（白老町アヨロ遺跡）とH 37 栄町～江別太２式並行期と後北C_1式期に１例づつ（江別市坊主山遺跡），道東では宇津内ⅡｂⅠ式期の１例（北見市常呂川河口遺跡）と極めて少ない。

〈環石〉これはドーナツ形の扁平な垂飾である。石材は流紋岩滑石・頁岩・琥珀があり，道央では琥珀製，道東網走では頁岩製と地域によって素材が選ばれる［広田良成 2003］。環石は道東を初源とし，道南・道央に拡がる。道南・道央では管玉と供伴し，道東網走では琥珀玉と供伴し，各玉との親和がみられる。

〈ガラス小玉・滑石平玉〉ガラス小玉は後北Ｂ式期・新に出現し，後北C_2・Ｄ式期に急増し全道に拡がり，円・刺Ⅲ期まである。色調は濃青（藍青）と淡青（水色），化学組成については，後北C_1式期はカリガラス，後北C_2・Ｄ式期はカリ石灰ガラスが多く，円・刺Ⅵ期以降にソーダ石灰ガラスがある［岡部雅憲ほか1995］。弥生後期～古墳時代後期の石川県・関東・長野県ではカリ石灰ガラスが多く，古墳時代中期以降にソーダ石灰ガラスが多い［小泉好延ほか1999，中村晋也2006］。北海道出土のガラス小玉の化学組成変遷はソーダ石灰ガラスの出現が遅いものの，これら地域の変遷と整合的である。ガラス小玉は琥珀平玉との供伴例はなく，碧玉管玉との供伴例は少ない（いずれも十勝地方の浦幌町十勝太若月遺跡で後北Ｂ式期１例・後北C_1式期１例）。ただし，碧玉管玉・琥珀玉が激減する時期にガラス小玉が出現するので排他的関係にあるといえない。なお，滑石平玉はガラス小玉に比べて出土例が少なく，同時期の東北地方に比べて北海道ではガラス小玉が好まれた。

〈組成と被葬者性別〉道南・噴火湾岸の南川Ⅲ群期～南川Ⅳ群期の事例では石鏃・石斧が男性墓に副葬される傾向がある［加藤邦雄1982］。道央では余市町大川遺跡GP-218（H 317期）男性墓から深鉢袖珍・石鏃・琥珀平玉が出土し，苫小牧市柏原５遺跡６号墳墓（アヨロ２b期）男性墓から深鉢中・石鏃・石錐・石斧が出土している。道東釧路の釧路市幣舞遺跡では晩期末葉～興津式期の単葬墓で男性７・女性４例が判別され，石鏃・矢柄研磨器・猪牙垂飾は男性墓，石斧は両性墓に副葬される傾向がある［釧路市教育委員1999］。道東網走では栄浦第一遺跡ピット16ａ（宇津内Ⅱb式期）男性墓から深鉢袖珍・深鉢小・石鏃・石槍・石斧・砥石が出土している。道東でも道南・道央と同じ傾向がある。以上より，石鏃・石斧・深鉢小・深鉢袖珍・壷は男性墓に副葬され，そのことから深鉢大・深鉢中・鉢中が副葬される墓は女性墓の可能性が高く，玉類は両性の副葬品と推定できる。

ｅ．追葬・合葬・再葬[(11)]：中間的属性

〈追葬〉有珠モシリ遺跡（南川Ⅲ群～南川Ⅳ群期）は成人女性墓に成人男性が追葬されている。偶数遺体に性の選択が生じていない場合，副葬品は男の組合わせと女の組合わせとに偏りがないはずであるが，石狩市ワッカオイ遺跡Ｄ地点（後北C_2・Ｄ式期），恵庭市西島松５遺跡（円形・刺突文土器群期）の偶数遺体では，副葬品の組合わせの偏りがある。このことは少なくとも後北C_2・Ｄ式期以降に「同性を同じ墓坑に埋葬する」規則があったことを示唆する。追葬例は２体が多く３体は極少ないので１回の追葬と考えられ，二世代の父息子・母娘や兄弟・姉妹が想定される。

〈合葬〉釧路市幣舞遺跡（晩期末葉～興津式期），伊達市有珠モシリ遺跡（晩期後葉～南川Ⅳ群期），室蘭市絵鞆遺跡（南川Ⅲ群～南川Ⅳ群期）の例は２～３体がほとんどであることから親子や兄弟姉妹・夫婦が想定される。ただし，年齢差があるので親子の可能性が高くなる。

〈再葬〉道南において縄文晩期～南川Ⅳ群期にかけて少数例（有珠モシリ遺跡・絵鞆遺跡）再葬が報告されている。ただし，これらの例は追葬に伴う「かたづけ」行為であった可能性があり，東日本～東北南部にみられる再葬とは異なる。

ｆ．墓制における属性の傾向

〈表出的属性〉配石については前葉～後葉を通じて広くみられ，道南・道央・道東ごとの特色はない。柱穴様土坑については，長軸上２本配置は道央在地系において自発した構造の可能性があり，四隅４本配置は道東釧路において自発する。そして，道東では長軸上２本配置は見られない。道央

では道東からの影響で四隅４本配置が発生し，道南へは道央を介して広まる。

〈内在的属性〉主体部構造については，土坑がおもで，道東釧路では興津式の頃に横穴を掘りこむ形態がみられる。埋葬姿勢については，主に側臥屈葬で，道東釧路では晩期後葉～興津式期にかけて座葬がみられる。

坑底平面形については，道南では前葉～中葉にかけて楕円が多く，後葉には円・楕円形が主要になる。道央恵山系では前葉～中葉にかけて円・楕円形が多く，隅丸方形がある。道央在地系では前葉～中葉にかけて円・楕円形が多く，隅丸方形の出現は道央恵山系（紅葉山33遺跡・元江別１遺跡）からの影響と考えられる。後葉には円・刺Ⅴ期までは円形・楕円形が主要で，円・刺Ⅵ期以降は隅丸方形が主要なる。道東では前葉に円・楕円・小判・隅丸方形がみられ，中葉に円・楕円・小判形が多く，後葉に楕円・小判形が多い。また，十勝地方では後北C_1式期に合葬専用の舟形土坑が自発し，後北C_2・Ｄ式期に道央へ広まったと考えられる。

袋状土坑については，初例が道央・余市町大川遺跡GP-676（アヨロ２a式期）で，Ｈ37丘珠～Ｈ37栄町古期の在地系に類例がないので道央恵山系で発生した可能性が高い。次の江別太１式期に道央在地系に，道東網走には遅れて後北C_2・Ｄ式期に広まる。道南には現在のところない。また，道央恵山系では壁面に横方向に掘削され，江別太２式以降の在地系では長軸右側の壁面と坑底の境において下方に掘削される例が出現する。

南川葬法の置き礫については，アヨロ１式期の道央恵山系に自発し，道央在地系は恵山系に遅れて，道南では道央恵山系に遅れて出現する。道東にはなく道央以西に広まる。いっぽう，ウサクマイ葬法の置き礫については円・刺Ⅵ期に道央で自発し，道南・道東になく道央だけにみられる。

〈中間的属性〉前葉～中葉の副葬品組成は地域間に大きな相違はない。ただし琥珀平玉と碧玉管玉は道央部を境に排他的に分布し，双方が出土する道央部以東においても供伴例が極めて少ない。環石は道東を初源とし道南・道央に拡がり，碧玉管玉・琥珀玉と供伴する。後葉の副葬品組成にも地域間に大きな相違はなく，後北C_2・Ｄ式期には剥片石器・石斧・土器小～袖珍・ガラス小玉，円・刺期Ⅰ～Ⅴ期には剥片石器・土器小～袖珍・ガラス製小玉，円・刺Ⅵ～Ⅷ期以降は金属製品・土器がある。

⑵ 住居（図７，表７）

ａ．住居平面形：表出的属性

道南では縄文晩期より続く円形・楕円形が主体である。道央では道南の傾向に隅丸方形がくわわり，後北C_1～後北C_2・Ｄ式期には隅丸方形・楕円形の２形態がある。道東網走では宇津内Ⅱb式期まで方形・隅丸方形が主体であり，後北C_1式期には隅丸長方形・楕円形，後北C_2・Ｄ式期には隅丸長方形・楕円形が主体となる。道東釧路ではフシココタン下層式期までは円・楕円形，興津～下田ノ沢Ⅱ式期にかけて隅丸長方形・隅丸方形・小判形が主体となる。

出入り口と推定されている舌状張出しは，道東網走の晩期後葉に出現し，道東釧路ではやや遅れフシココタン下層式期，道央にはＨ37栄町古，道南には南川Ⅲ群式期に出現する。道東では後北C_2・Ｄ式期いっぱいまで継続するが，道央では後北C_2・Ｄ式期に一例（札幌市Ｋ518遺跡・HP-01）のみである。

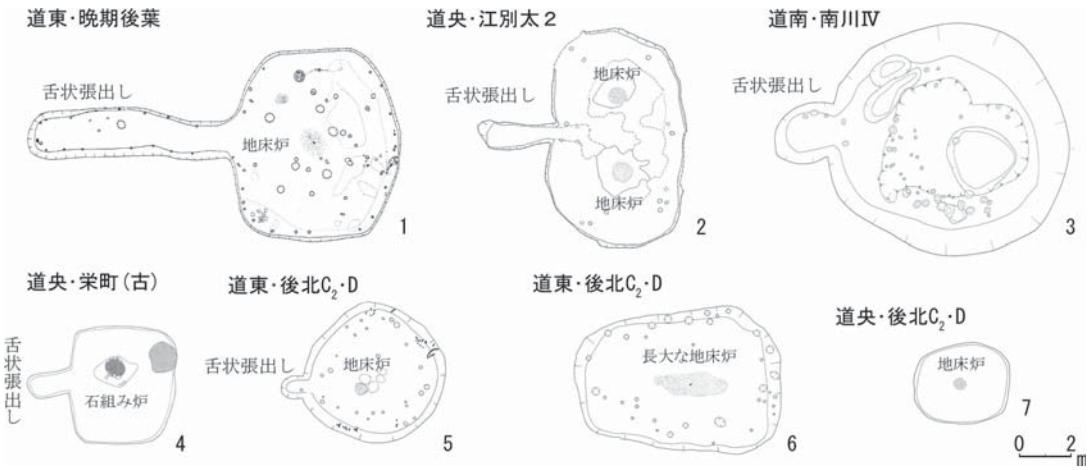


図7　住居の表出・中間的属性

表7　住居の表出・中間的属性

		前葉							中葉					後葉
平面形	道南	尾白内Ⅱ	兜野式	青苗B(古)		青苗B(新)								
		国立療養所裏ⅩⅧ群				下添山	西桔梗B_2	南川Ⅲ	南川Ⅳ		聖山KⅡ			
		?						円・楕円＋舌状張出し			?			
												後北C_1	後北C_2・D	
												?		
	道央	H37丘珠(古)	H37丘珠(中)	H37丘珠(新)	H317(古)	H317(新)	H37栄町(古)	H37栄町(新)	江別太1	江別太2	後北A	後北B	後北C_1	後北C_2・D
		円・楕円＞隅丸方					円・楕円＞隅丸方＋舌状張出し							
							アヨロ1	アヨロ2a	アヨロ2b	アヨロ3ab				
							円・楕円＞隅丸方＋舌状張出し							
	道東釧路	フシココタン下層			興津				下田ノ沢Ⅰ		下田ノ沢Ⅱ			
		円・楕円＞隅丸方＋舌状張出し			隅丸方・小判＋舌状張出し									
		縄文晩期後葉から											後北C_1	後北C_2・D
													?	
	道東網走	栄浦一・二群			元町2				宇津内Ⅱa		宇津内Ⅱb			
		方・隅丸方＞楕円＋舌状張出し												
													後北C_1	後北C_2・D
													方・隅丸方＞楕円＋舌状張出し	

主軸長（舌状張出しを除く）	道南	尾白内Ⅱ	兜野式	青苗B(古)		青苗B(新)								
		国立療養所裏ⅩⅧ群				下添山式	西桔梗B_2	南川Ⅲ	南川Ⅳ		聖山KⅡ			
		?						6m≦			?			
		縄文晩期5m≧											後北C_1	後北C_2・D
													?	
	道央	H37丘珠(古)	H37丘珠(中)	H37丘珠(新)	H317(古)	H317(新)	H37栄町(古)	H37栄町(新)	江別太1	江別太2	後北A	後北B	後北C_1	後北C_2・D
		4～8m											4m≧	
		縄文晩期2～5m					アヨロ1	アヨロ2a	アヨロ2b	アヨロ3ab				
							4～8m							
	道東釧路	フシココタン下層			興津				下田ノ沢Ⅰ		下田ノ沢Ⅱ			
		5m≧			6m≦									
		縄文晩期5m≧											後北C_1	後北C_2・D
													?	
	道東網走	栄浦一・二群			元町2				宇津内Ⅱa		宇津内Ⅱb			
		6m≧または6m≦												
													後北C_1	後北C_2・D
													6m≧または6m≦	

b．柱組構造：内在的属性

各地域ともに晩期前葉以降は竪穴内床面に主柱穴を設けない。その構造は，竪穴外に斜め柱を設ける角錐型の屋根組み構造である可能性が高いことから，壁がない「伏屋」・極めて低い壁が斜立する「伏屋」と推定できる。少数例外として，道東・網走の斜里町宇津内遺跡などが床面住居壁際に，後北C_1式期の道央・江別市大麻22遺跡H–2が竪穴中央に，後北C_2・D式期の道央・K 518遺跡・HP–01が床面壁寄り，がある。

c．炉の形態：中間的属性

道南・道央では地床炉の周囲に構造物を設ける例は少なく，道南では南川Ⅲ～Ⅳ群期に瀬棚町南

川遺跡・北斗市茂別遺跡に石組み炉があり，道央では晩期後葉～アヨロ２b式期に深川市広里１遺跡，札幌市N 295・N 30・K 39・T 151 遺跡，余市町大川遺跡など石狩川流域・日本海側に石組み炉がある。いっぽう，道東では石組み炉・長大な炉・一住居二ヶ所の設置が盛んである。道東網走では晩期後葉～宇津内Ⅱb式にかけて石組み炉が多数みられ，宇津内Ⅱb式には一住居二ヶ所の石組炉が多く，後北C_1式期は楕円形・長大な小判形の地床炉が多い。道東・釧路でもフシココタン下層～下田ノ沢Ⅱ式期にかけて石組み炉・長大な炉がみられ，興津～下田ノ沢Ⅰ式期には長大な小判形の炉がある。また，下田ノ沢Ⅱ式期には楕円形を連接させて長大化した小判形の石組炉がある。道東の後北C_1式期は中央に一ヶ所設け，後北C_2・D式期は住居長軸上に二ヶ所または一ヶ所が多い。いっぽう道央では後北C_2・D式期に到るまで住居長軸上に一ヶ所が主要である。例外として，一住居二ヶ所が深川市北広里３遺跡１号住居に１例（江別太２式期）ある。

d．規模：中間的属性

道南の縄文晩期では主軸長５m以下であるが［宮本長二郎 1996］，南川Ⅲ・Ⅳ群期になると主軸長６m以上（舌状張出しを除く）に大型化する。道央の縄文晩期では主軸長２～６mの住居がほとんどで，続縄文初頭～後北Ｂ式期には主軸長４～８mにやや大型化する［高倉　純 2005］。道東網走では続縄文初頭以降，主軸長６m以下の小型と６m以上の大型の２規格がある。道東釧路では類例は少ないものの縄文晩期～フシココタン下層式期では主軸長５m以下で，興津式期以降６m以上（張出しを除く）に大型化する。後北C_1式期以降においては，道東網走では大小の２規格が継続するが，道央では主軸長４m以下に小型化する。

e．住居における属性の傾向

〈表出的属性〉平面形については，道南では円形・楕円形が主体である。道央では円形・楕円形主体で，隅丸方形がH 37 栄町古期に道東から伝わる。道東網走では方形・隅丸方形が主体であり，後北C_1式期に隅丸長方形・楕円形が主体となる。道東釧路では円形・楕円形，興津式期に隅丸長方形・隅丸方形・小判形が主体となる。

舌状張出しについては，道東網走の晩期後葉に出現し，道東釧路ではやや遅れ，順次道央と道南にも広がり，道央では後北C_2・D式期に廃れる。なお，円形・刺突文土器群期の道南・道東における検出例はなく，道央では余市町大川遺跡・恵庭市茂漁５遺跡の例があり，後北C_2・D式期と同じ傾向がうかがえる。

〈内在的属性〉柱組構造について，各地域ともに晩期前葉以降は竪穴内床面に主柱穴は設けない。

〈中間的属性〉炉の形態については，道南・道央では一住居一ヶ所が多く，石狩川流域・日本海側に石組み構造が少数みられる。道東では石組み炉・長大な炉の設置が盛んで，一住居二ヶ所の石組炉も多い。道東釧路でも長大な炉や連接させて長大化した石組炉がある。

規模については，道南では南川Ⅲ・Ⅳ群期になると大型化する。道央では道南よりも早く続縄文初頭～後北Ｂ式期にやや大型化する。道東釧路では興津式期，道東網走では続縄文初頭に大型化する。また，道東網走では後北C_1式期以降に大小の２規格が継続し，道央では小型化する。

3．属性転移

⑴　属性転移の様相

〈土器〉表出的属性については，H 37 栄町～江別太２式期において，道南起源の要素は道央へ転移するが道東北には伝わらず，道東北起源の要素は道央へ転移するが道南には伝わらない場合が多い。道央起源の要素は道南・道東北の両方に伝わる場合が多い。後北C_1式期以降には道央起源の要素が道南・道東へ転移し，東北地方へも転移する（❷–1–⑴参照）。内在的属性については，前葉には属性交換はない。江別太１式期には道南から道央へ・道央から道東へ，後北C_1式期以降には道央から道南・道東へ転移する。後北C_2・Ｄ式期に道央から道南・道東・東北地方へ転移し，円・刺Ⅶ期以降に東北北部から北海道に転移がある。中間的属性については，前葉～中葉において道央部から道南・道東に属性転移があるものの，各地域でその採用には小変がある。後葉には道央部起源の要素が道南・道東へ転移し，東北地方へ一部の転移がある（❷–1–⑴参照）。

〈石器〉表出的属性については，前葉は道東から道央へ・道央から道東へ・道南から道央へ，中葉は道南から道央へ・道央から道東網走へ，後北Ａ～C_1式期には道央から道南・道東へと転移がある。内在的属性について地域の相異は見られず，中間的属性については円・刺Ⅰ期に道央以東から道南へ転移がみられる。

また，東北地方において後葉以降に黒曜石製小型円形掻器が出現する。これは当該地において頁岩多用の伝統が途絶した後に起こった現象であり，北海道産の石材も使用されていることから，北海道から東北地方への内在～表出的属性の転移と考えられる［鈴木　信 2004 b，山田晃弘 2008］。

〈墓制〉道央の墓制は，表出的属性が江別太１式期に道央恵山系から道南に転移し，江別太１式期に道央恵山系から道央在地系に転移する。内在的属性が江別太１式期に道央恵山系から道央在地系・道南へ転移し，江別太２式期に道央恵山系から道央在地系へ転移する。道南の墓制には後北C_2・Ｄ式期以降に道央の内在～表出的属性が転移して来る。道東の墓制には後北C_2・Ｄ式期以降に道央の内在・中間的属性が転移して来る。

東北地方では道央の墓制が転移し（❷–1–⑴参照），表出的属性は後北C_2・Ｄ式期～円・刺Ⅷ期を通じて北海道と東北地方とで共通し，内在的属性は後北C_2・Ｄ式期には相違もあるが，その後の円・刺Ⅰ～Ⅷ期には共通する。ただし，内在的属性の一部（ウサクマイ葬法の置き礫）は道南・道東に転移しないので，東北地方への転移は道央から直接おこなわれた可能性が低い。

〈住居〉表出的属性（平面形）については道東網走から道央へ転移し，表出的属性（舌状張出し）については，道東網走から道東釧路，H 37 栄町期には道央へ，江別太１式・南川Ⅲ群式期には道央をつうじて道南へ順次転移する。内在的属性に地域の相異は見られないので属性交換はない。道南・道央の中間的属性（石組組み炉・炉の設置個数）は，道東から表出的属性（舌状張出し）と共に転移して来る。

⑵　属性転移の傾向（図８）

遺物の表出的属性は，前葉～後北Ａ式期には道南と道央が相互に，道央と道東が相互に，道南・道東から道央へ，道東から道央へ，道央から道東へ，道央から道南へ，と多様な転移がある。後北

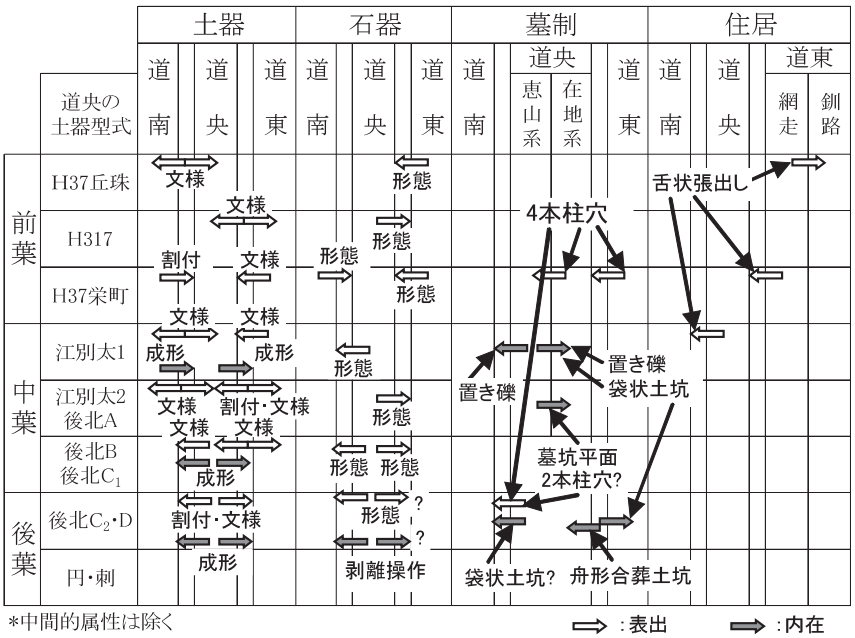


図 8　属性転移の状況

C_1 式期以降には道央から道南・道東へ，道央と道東が相互に，とやや単純な転移になる。遺物の内在的属性は，H 37 栄町期に道央から道東へ，江別太 1 式には道南から道央へ，道央から道東へ，と単純な転移になる。後北C_1 式期以降には道央から道南・道東へ，と単純な転移になる。

遺構の表出的属性は，前葉～江別太 1 式期には道東から道央，さらに道南へ，と単純な 1 方向に転移する。後北C_2・D式期には道央から道南に拡がる。遺構の内在的属性は江別太 1 式～後北 A 式期以降は道央恵山系から道央在地系・道南へ拡がる。後北C_2・D式期には道央から道南・道東へ拡がるいっぽうで，道東から道央へ転移する。

❷……異質・同質接触としての物質交換

1．物質交換の内容

「交換方法」「交換関係」「交換物資」からみると交換は三つの様態をあらわす。第一は，文化的帰属意識の共有はなく，「もの」の交換に終始する表層的物資交換。第二は，文化的帰属意識の共有に基づいた交換であり，「かかわり」と「もの」が強く結合する深層的物資交換。第三は，文化的帰属意識は異なるが，「かかわり」と「もの」に弱い結合がみられ，第一・第二の交換に偏らない中層的交換である［鈴木　信 2007 a］。表層的物資交換と中層的交換は史料にも現れる。

『日本書紀』斉明 4 （658）年是歳条によれば，阿倍比羅夫は粛慎から貢物を得る。(12)

『日本書紀』斉明 6 （660）年 3 月条によれば，阿倍比羅夫は粛慎と沈黙交易を試みる。

『日本書紀』持統 10（696）年 3 月条によれば，渡嶋蝦夷と粛慎が賜物を受ける。

斉明 6 年 3 月条の交易は表層的物資交換であり「遭遇型交易」にあたる。斉明 4 年条は降伏の証

なので片務的で，持統10年3月条は貢納的交易なので片務的であるが，両件は中層的交換であり，倭王権にとって貢納的交易は継続すべき重要政務であり，北海道続縄文人にとっては交易機会が確約できる相手が出現した。これらは「渡海交易」[13]にあたる。

渡海交易は「もの」を恒常的に動かすために「かかわり」があるため，「かかわり」と「もの」との結合乖離が容易である。そのために当事者間の紛争・交換の断続も生じやすく，交換途絶の回避は表層・深層的物資交換よりも複雑になる。渡海交易の基本戦略は，物理的距離を社会的距離に置換し，社会的関係を緊密にすることで物理的距離を克服する（「ソト＝異質」関係の「ウチ＝同質」化）であり，２種類ある。ひとつは，移住によって社会的関係を緊密にする形態で「定住型交易」と呼ぶ。具体的には北海道続縄文人の定住（世代を重ねる）であり，北海道系土器・北海道系墓制が東北地方に出現することをもって想定される。もうひとつは，一時的に滞留することによって社会的関係をある程度隔てる形態で「滞留型交易」と呼ぶ。具体的には北海道続縄文人の滞留（世代を重ねない）であり，北海道系土器が東北地方に分布するが北海道系墓制が存在しないことをもって想定される。

いっぽう，深層的物資交換は「かかわり」の結果として「もの」が動く。中層的交換の基本戦略が社会的距離を縮めることであるから，この基底には社会的距離が恒常的に縮んだ関係＝社会的距離を緊密にする必要のない関係（「ウチ」の関係）がある。この交易が「域内交易」にあたる。

これら物質交換の主な目的は「遭遇型交易」・「渡海交易」が交易（取引的・売買的交換）で，渡海交易は自製・獲得不可能な物資（広域交換財と呼ぶ）を求める。「域内交易」は財の分配（儀礼的・贈与的交換）であり，域内交易は自製・獲得容易な物資（域内交換財と呼ぶ）を主に求める。

２．異質接触としての渡海交易

北海道と東北地方における渡海交易は，東北地方に現れる北海道系土器・墓制と鉄関連遺跡の分布の状況から，Ⅰ～Ⅶ段階に変遷する。そのうち，続縄文文化期の交易はⅠ～Ⅳ段階にあたる［鈴木　信 2003 b・2007 a］。

Ⅰ段階（弥生時代後期前半以前）（表５）：北海道からの移出財には実用財である石斧石材が，移入財には象徴的財である翡翠・幼猪・碧玉管玉・南海産貝装飾品がある。

移出石材は額平川流域（道央日高）に産する。道央日高では道東・道央・道南の異系統土器が出土するものの，固有の土器（表出的属性の一部・内在的属性が異なる）が存在する［松田宏介 2005・2006］。これは他地域の人が滞留しながら道央日高の人と石材交易をおこなったことを示し，石斧石材が移出財となっている後北Ｂ式期までこの状況が続くことも傍証となる[14]。

東北地方では続縄文土器そのものは見られず，南川Ⅳ群・後北Ａ～Ｂ・Ｂ式並行の聖山ＫⅡ群の表出的属性が転移した土器が津軽半島北半・陸奥湾周囲・下北半島・小川原湖周辺に極少数出土する[15]。そして，北海道系墓制は認められない。いっぽう，道東網走・道南において後北Ｂ式を副葬する土坑墓や包含層出土例が現れ，北海道には東北系土器が一定量みられず，恵山式のなかに二枚橋～田舎館２・３式の表出的・中間的属性の影響が確認できる［設楽博己 2003，高瀬克範 1998］。またそのころ，東北地方の日本海側では宇津ノ台式が佐渡島・新潟県沿岸まで西へ分布を拡げる［相沢清利 2002］。

東北地方において極少数の北海道系土器が沿岸部に出土するものの，北海道系墓制がないので北海道続縄文人の定住は始まっていない。日本海沿岸では後北Ａ～Ｂ・恵山↔念仏間↔宇津ノ台など，太平洋側では恵山↔田舎館２・３↔龍門寺と各型式が連接して分布する。以上より，その交易は，原産地（＝翡翠・碧玉製管玉などの採掘・加工）から日本海沿岸（島嶼部を含む）を滞留しながら中継ぎ式に運ばれる方法で，中継点は各型式分布の周縁域に散在すると考えられる。Ⅰ段階は中継ぎ式の滞留型交易を行なっている時期。[16]

Ⅱa段階（弥生時代後期後半）（表５）：北海道における移入財にはガラス小玉・金属器がある。ただし，金属器の出土量は極めて少なく，石器組成に変化がないので実用財といいがたい。移出財は，東北地方において弥生後期後半には石器自体が激減するので，石斧石材ではない。考古学上の直接的な証拠はないものの，漁労体系の変化（魚形石器の消滅・銛頭の変化）[17]から陸獣毛皮や海獣毛皮が考えられる。移入財は実用財の機能を有する象徴的財（「第二の道具」）であり，移出財は象徴的財に変わる。この組み合わせは縄文時代～Ⅰ段階の傾向と異なり，かつⅡb段階へと引き継がれる。

東北地方・新潟県では少数の聖山ＫⅡ群・後北C_1式が分布し，青森・新潟県では極少数の後北C_1式模倣がみられる。そして，北海道系の墓制は認められない。いっぽう北海道では，全道で多くの後北C_1式が墓・包含層から在地土器と混在し，道央以西に僅かに天王山系土器が認められる。またそのころ，東北北部起源の天王山系土器が福井県東部沿岸―関東北部まで分布を拡げる［相沢清利 2002］。

東北地方・新潟県において，少数の北海道系土器が日本海側に偏り分布するものの，北海道系墓制がないので北海道続縄文人の定住が起っている可能性は低い。ただし，北海道系土器（聖山ＫⅡ・後北C_1）と東北系土器（天王山系）が混在して新潟県まで拡散するので，それぞれが直接に北陸弥生土器圏（法仏・月影式）と接触するようになり，中継方式はとられなくなったと推定される。いっぽう，北海道においては後北式の分布とそれを副葬する土坑墓が全域に拡がり，人の動きに変化が見られる。Ⅱa段階にもⅠ段階の日本海側経路が踏襲されており，金属器・ガラス小玉は翡翠・碧玉管玉の流通の仕組みに乗って移入されると考えられる。Ⅱa段階は滞留型交易から定住型交易への移行期。

Ⅱb段階（古墳時代前期前葉～中葉）（表５・図９）：北海道からの移出財は前代から引き続き陸獣毛皮・海獣毛皮が考えられる。移入財はガラス小玉（全道に分布し，当該期に急増）と刀子・鉇・板状鉄斧（金属器は組成に変化があり実用財としての用途が増す）がある。小樽市蘭島餅屋沢遺跡の当該期の土坑墓からはコメが出土する。

東北地方では後北C_2・Ｄ式とその模倣が，日本海側は新潟県まで，太平洋側には経路状分布を示して宮城県にも拡散し始める。出土が集中するのは馬淵川・新井田川下流，新井田川上流，雫石川・中津川・北上川の合流点，江合川上流の大崎平野北部である。また，東北地方においてⅡb段階以降に方割礫・黒曜石製石器が少数出土し始める。❶―3―(1)で述べたようにそれらは製作・使用する人々の移住を示すと考えられる。いっぽう，北海道では後北C_2・Ｄ式と道央の墓制が北海道全域にひろがり，極少量の赤穴式が道央以西に分布する。

東北地方における北海道系墓制は極少数ではあるが青森県（１遺跡）・岩手県（４遺跡）・秋田県

（1遺跡）にみられる。これらを当該期の北海道と比較すると，東北は楕円形である（北海道は円形），袋状土坑が長軸上である（北海道は長軸右），袋状土坑の位置は様々（北海道は坑底と壁面の境がやや多い），柱穴様土坑は「長軸両端2本」（北海道も同じ）である。

東北地方太平洋側において，新らたに北海道系土器が経路状に分布し，北海道系墓制が出現する（内在的属性においては若干の変異があるが，表出的属性・中間的属性は共通する）ので少数の北海道続縄文人が物資の集積地点（北海道系土器の集中点）を結んだ経路に移住し，恒常的定住型交換を開始した。この段階は，Ⅱa段階を踏襲しながら直結型の関係に強化した。金属製品は実用財の機能が増し，当該期以降，鋼・金属製品獲得の交易が他の生業活動の基盤となる。Ⅱb段階は定住型交易の開始期。

図9　東北地方における後北C_2・D式の分布

Ⅲ段階（古墳時代前期後葉～飛鳥時代前半）（表5）：北海道からの移出財は前代から引き続き陸獣毛皮・海獣毛皮が考えられる。移入財はガラス小玉（量が多いのは円・刺Ⅲ期まで）と金属器（円・刺Ⅰ期に石器に切る機能が喪失する［高橋　哲 2005］ので，金属器は実用財となり，円・刺Ⅵ～Ⅷ期には出土例が増えるので安定的供給があった）がある。小樽市蘭島D遺跡の円・刺Ⅷ期の土坑墓からはコメが出土する。

東北地方では円形・刺突文土器が日本海側は山形県まで，太平洋側は経路状分布を示して宮城県まで分布する。この時期の後半になると分布域が北退する。出土が集中するのは馬淵川・新井田川下流，馬淵川・安比川の合流点，雫石川・中津川・北上川の合流点，胆沢川・北上川の合流点，江合川上流の大崎平野北部で前段階よりはやや分散する。

東北地方における北海道系墓制は極少数青森県（2遺跡）・岩手県（2遺跡）・秋田県（1遺跡）・宮城県（1遺跡）にみられる。Ⅰ～Ⅴ期について当該期の北海道の墓制と比較すると，東北は楕円形が多い（北海道は円形），袋状土坑が長軸右が多い（北海道も同じ），袋状土坑の位置は壁面が多い（北海道も同じ），柱穴様土坑「長軸両端2本」である（北海道はデータがない）。Ⅵ～Ⅷ期について並行期の北海道の墓制と比較すると，東北は隅丸方形が多い（北海道は円形と隅丸方形），袋状土坑が長軸右（北海道は長軸上），袋状土坑の位置は壁面が多い（北海道も同じ），「四隅突出」墓坑がある（北海道も同じ），長方形木棺に袋状土坑が備わる（北海道にはない）。

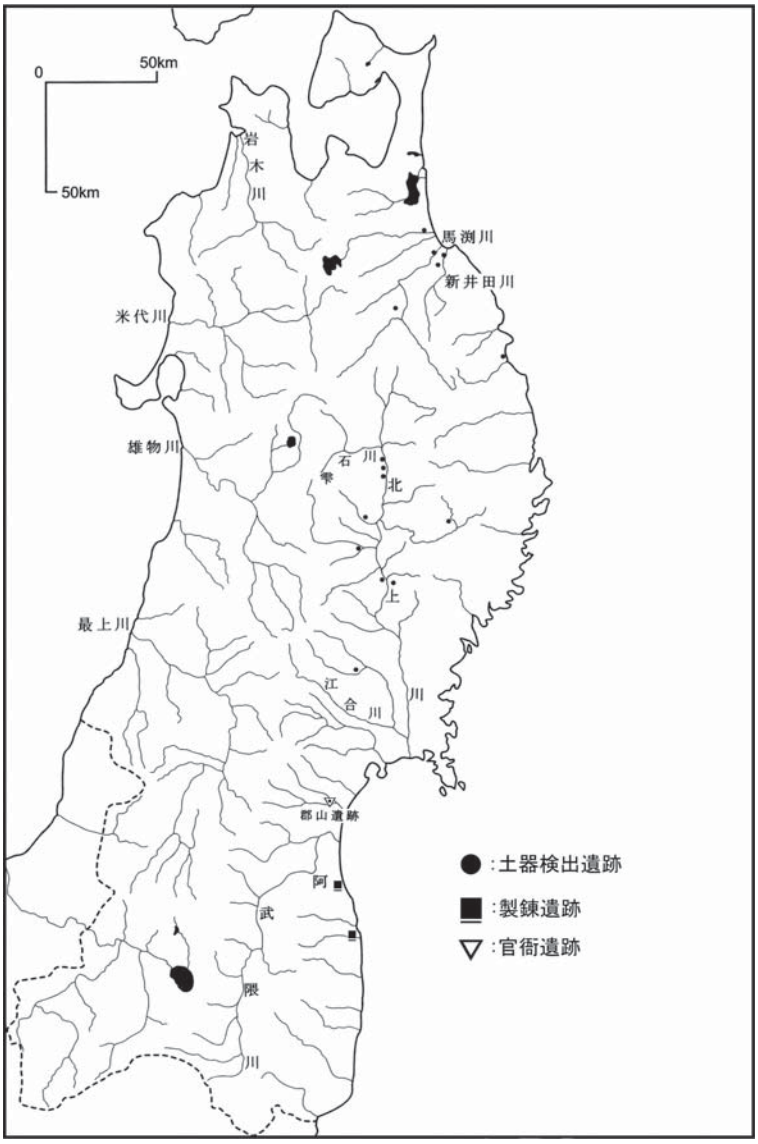


図10　東北地方におけるⅩ～Ⅺ期円形・刺突文土器の分布

東北地方において北海道系土器の経路状分布に短縮があり，北海道系墓制には在地墓制との融合（円・刺Ⅰ～Ⅴ期：内在的属性・中間的属性においては若干の変異はあるが共通点が多い。円・刺Ⅵ～Ⅷ期：内在的属性においては変異・融合がある）がみられ，北海道内では東北系土器の減少がある。北海道続縄文人と東北古墳時代人と混交が進み，関係は恒常的になるいっぽうで墓制は変容し始める。

北海道では，Ⅲ段階前半には定住型交易の安定により金属製品の恒常的確保が可能となる。Ⅲ段階後半には金属製品の潤沢な供給により利器の鉄器化が進んで石器が殆んど廃用された。「かかわり」重視の方法（社会的距離を縮める方法）が「もの」の取引に偏った交換関係に変容し始める。Ⅲ段階は定住型交易の完成期。

Ⅳ段階（飛鳥時代後半）（表5・図10）：遺物に現れた移入品目は，鉄鏃・刀子・鉄斧や鉇・鉄鎌。象徴的財の大刀・横刀・攝子・ガラス玉がある。布類は鉄製品を梱包した痕跡として遺存する。

史料に載る移入品目は，持統10年3月条では「錦袍袴」・「緋紺絁」・「鉄斧」，斉明6年3月条では「綵帛」・「兵鉄（武器または素材）」がある。移出品は斉明4年是歳条には生羆と羆毛皮があり，律令期の史料から海獣毛皮も含まれる可能性がある。

東北地方では北海道系土器の分布はさらに縮小する。出土が集中するのは馬淵川・新井田川下流，雫石川・中津川・北上川の合流点，胆沢川・北上川の合流点と前段階よりも分散傾向がある。

東北地方では，北海道系土器の経路状分布・北海道系墓制が消失しつつある。前掲の『日本書紀』斉明条・持統条に拠れば倭王権と海路を通じて接し，貢納的交易を始めた。よって，蝦夷との社会的距離を縮める必要がなくなり，東北在住の北海道続縄文人は交易仲介者としての役割を失い在地人化した。定期的に滞留して交易する「もの」の取引に偏った関係へ移行する。Ⅳ段階は定住型交易から滞留型交易への移行期。

3．同質接触としての域内交易

⑴　域内交易の様相

北海道において琥珀・剥片石器石材の主な原産地は偏在し，頁岩素材・製品は道南に，黒曜石素材・製品は主に道東・道央に，琥珀素材・製品は道東・道央に分布する。これらは前葉～中葉における土器型式の地域差をまたいで拡がる。いっぽう，渡海交易品（翡翠・碧玉管玉・ガラス小玉・金属器）はそれらより少量で，かつ道南・道央・道東に琥珀・剥片石器石材よりも広く分布する。くわえて，❶–2–⑴で先述したように琥珀と碧玉管玉・ガラス小玉には分布の違い・供伴状況の違いがある。これらより，分布の広狭・出土量の多寡・組み合わせの相違は，価値の上下に相応することが導かれる。よって，琥珀・黒曜石・頁岩は広域交換財より下位の交換財で，かつ土器型式差を越えるので，域内交換財のなかでも上位にある。

剥片石器石材は後葉の円形・刺突文土器Ⅰ期に入ると，頁岩使用の低減・黒曜石の多用がみられる。そのいっぽう，黒曜石原産地の種類は一遺跡において，最近隣の原産地に偏るものの単一産地が占めることはない。このことは入手の経緯・経路においてある程度の不特定性＝多様性があることを示しており，琥珀・剥片石器石材など上位の域内交換財は緩やかな関係において交換された可能性を示す。[18]

剥片石器石材・琥珀交換の下位，つまり土器型式の分布に相応する交換財は遺物として見当たらない。分布の広狭により交換財の価値が階層状（広域交換財の下位に域内交換財）に布置されるので，剥片石器石材・琥珀の下位交換財として食料が導かれる。そして，植物遺存体は道南・道央で共通するものが多く，動物遺存体は道南・道央・道東で異なる種類があることから，植物性食料が上位，動物性食料が下位に位置づけられる可能性がある。

以上より，食料交換はより親密な関係（「ウチ」の関係）においておこなわれたといえ，その機能には，次に述べるように資源偏在を調節する機能（＝財の分配）があり，それは関係の確認・維持の機能でもあるため，儀礼的・贈与的であるといえる。

⑵　域内交易の機能

狩猟漁労・採集の成果（広域交換財・域内交換財・自家消費財）には地域・季節によって変動が

あるので，財は季節・地域ごとに偏在する。そして，渡海交易の原資（広域交換財）となる毛皮獲得猟は「周季的・生業活動域広・少量獲捕」という性質から「射倖性高」労働[19]という不安定な構造を持つので，原資獲得を下支えする生業（「周季的・活動域狭・多量獲捕」「射倖性低」という性質で，域内交換財・自家消費財を生む）と表裏の関係にある。

財の偏在を埋める方法は，移住・獲得力の増（＝労働力の増・技術の改良）が挙げられるが，住コストの増大・他の共同体との関係や石材・鉄器の需給が不安定になり，人口の増大は資源の枯渇に繋がる。以上より，域内交易には財の偏在を調節する機能が備わる。

4．交換財の変遷から見た渡海交易・域内交易・生業の関係

渡海交易Ⅰ段階～Ⅱb段階には黒曜石素材が近隣産地へ集約し，頁岩の使用は低減するものの金属器の組成・出土量は少なく，狩猟具・加工具の主要な材質は石・骨角であり，生業は石器・骨角器によって維持された。

渡海交易Ⅲ段階前半には石器素材は殆どが黒曜石となり，更に近隣産地へ集約が見られ，北海道内における神居古潭渓谷・額平川流域産石斧石材の需給関係も途絶え，石器は器種が急激に減じており道央では小型円形掻器・剥片の坑底副葬品がみられなくなる。一方で，金属器の器種は増加がみられ伐採・加工具が充実するものの，いまだ出土例に増加は認められない。渡海交易のⅢ段階後半になって擦文文化期につながる組成がほぼ揃う。出土量の増加が認められるのもこのからである。利器が完全に鉄器化された段階はこの時期である。

渡海交易Ⅰ段階～Ⅱb段階は利器の鉄器化は進捗せず，金属器は象徴的な実用の交換財であった。渡海交易Ⅲ～Ⅳ段階は利器の鉄器化が進み石器が殆んど廃用され，金属器は実用的な交換財となった。その背景には金属器の潤沢な供給をうかがわせる。また，渡海交易Ⅱb段階は石材の需給関係・圏が金属器の需給関係・圏に交代しつつあり，渡海交易Ⅲ～Ⅳ段階以降に石材の需給関係は清算され，海を越えた金属器の需給関係に再編される。

金属器・鋼が珍物の段階は表層的物資交換で支障はないが，恒常的需要には金属器・鋼の流動量を増すために中層～深層的物資交換が必要になる。実際は交換関係に流動性のある中層的交換（渡海交易）がおこなわれた。

毛皮獲得猟の成果＝渡海交易の成果は副葬品[20]からみると，個人財に変換されていたようで，蓄積差があり分配・調節はない。よって，毛皮獲得猟は「個人分散型」の生業である。そのため，下支え「団体集約型[21]」生業（分配可能な域内交換財の生産）と分配機能がある域内交易によって毛皮獲得猟は維持される。渡海交易の進捗により，これらにそれらの機能が強く求められるようになった。

中層的交換（渡海交易）は，生業を変化させ，文化要素の変化を招いた。この連鎖は生業の二重構造（渡海交易の原資をまかなう生業・それを支える生業）と域内交易の調節機能により維持可能となる。Ⅱa段階に始まる渡海交易↔域内交易↔生業が直結した関係の成立は，弥生後期に東北地方で起こった利器の鉄器化が誘因である。

❸……文化接触と物資交換の関係

1．属性転移と文化変容

⑴　属性構造とその転移

❶－3より転移には3つの構造がみえてくる。表出的属性は，中間・内在的属性に比べて転移が頻繁に起こる。前中葉には相互方向が多く，後葉には道央から道南・道東への放散的1方向の傾向が強い。遺物においては1方向・相互方向があり，遺構においては1方向の傾向が強い。これらより，表出的属性は「変異性が強く，現地性が弱く，容易に転移し，伝達する際に欠落しにくい」が導かれる。内在的属性は，表出・中間的属性に比べて転移は頻繁に起こらない。中葉には1方向で，後葉には道央から道南・道東へ放散的1方向の傾向が強い。遺物・遺構おいてはともに1方向の傾向が強い。これらより，内在的属性は「変異性が弱く，現地性が強く，転移は容易でなく，伝達する際に欠落しやすい」が導かれる。

そして，内在的属性では，後葉にのみ遺構・遺物において属性が同時に転移する。いっぽう，表出的属性においては，遺構・遺物の属性が同時・同方向に転移する場合と遺物の属性が単独に転移する場合がある。よって，不変性・現地性の強弱は「遺構の内在的属性≧遺物の内在的属性＞遺構の表出的属性＞遺物の表出的属性」が導かれる。

⑵　属性転移からみた文化変容の諸形態

冒頭で「文化接触とは異文化間におけるヒト・モノを授受する相互関係で，それらに付帯するコト（情報）・付帯しないコト（情報）の授受もある。それは文化変容（文化同化・文化異化・文化交代）をつうじて顕在化する。……」と言表した。

ヒトの授受とは婚姻・奴隷を含む長期にわたる広い意味でのヒトの異動である。コトの授受とは情報の移動である。モノの授受とは物体自体＝交易品の移動である。そして，文化変容には文化同化・文化異化・文化交代があり，文化同化とは転移先において複数の文化が合一すること，文化異化とは転移先において複数の文化が並立すること，文化交代とは転移先の文化が交換されることである。

以下においてヒト・コト・モノの授受における属性転移の発生と文化同化・文化異化・文化交代との関係を検討する。

ａ．ヒトの授受によって生じる属性転移ｉ

具体例として，江別太1式期に土器の成形が道南→道央へ・道央→道東へ転移すること，江別太1～2式期における墓の内部構造が道央恵山系→道央在地系・道南へ転移すること，後北C_2・D式期に合葬墓の坑底平面形が道東→道央へ転移すること，があげられる。具体例に共通するのは，転移した属性が転移先の属性と交換されるのではなく混在することである。この場合は，転移先において表出・中間的属性が抑止されて，内在的属性が潜在した。その結果一部に文化異化が生じた。

以上より，ヒトの授受によって生じる属性転移の第一は，遺物・遺構の内在的属性のみが転移す

ることである。これは変異性強・現地性弱である内在的属性に対して移転制限するので，転移先には弱い強制的動機に基づく属性の受容が起こった。

ｂ．ヒトの授受によって生じる属性転移ⅱ

具体例として，後北C_1式期に道央の土器属性・石器形態が道南・道東に転移し，後北C_2・Ｄ式期に道央の墓制・土器属性・石器形態・剥片石器石材選択が道東・道南に転移すること，があげられる。具体例に共通するのは，多量・継続的に属性が転移した場合には転移先の属性と交換されることである。この場合は，後北C_1式期に属性が多量・継続的に転移したので，文化異化が持続拡大して文化交代が生じた。後北C_2・Ｄ式期にはさらに多く，かつ遺構・遺物の３属性が揃って転移（＝社会構成・文化がそのまま転移）したので，その結果転移先では文化交代した。

以上より，ヒトの授受によって生じる属性転移の第二は，遺構・遺物の表出・内在・中間的属性すべてが転移することである。これは３属性に対して移転制限しないので，転移先には自発的動機に基づく属性の受容が起こった。

ｃ．ヒトの授受によって生じる属性転移ⅲ

なお，表出・内在・中間的属性全てに制限がある場合は移転先では完全な文化同化が生じる。授受の動機は，３属性転移に対して制限があることから，転移先には強い強制的動機によって属性の受容が起こる。

ｄ．情報の授受によって生じる属性転移

具体例として，土器ではボタン状貼付文・吊り耳・疑縄貼付文など一部の表出的属性（表２）があげられる。道央における道東からの搬入土器はほとんどないが，その場合においても表出的属性の一部が転移しているので，この表出的属性転移は「モノの授受」によって生じていない。住居では舌状張出し・石組み炉など一部の表出・中間的属性があげられる（表７）。住居の場合は遺構であるから「モノの授受」ではない。そして，２件の具体例は「ヒトの授受　（ヒトの授受には内在的属性の転移が伴う）」に付帯していない。以上より，コトの表出・中間的属性がモノ（交易品）・ヒトの授受に付帯せずに転移することが導かれた。具体例に共通するのは，転移した属性が転移先の属性と混在することである。この場合一部に文化異化が生じた。情報のみが転移する場面は短期的滞留における遺物・遺構の実見や口伝が想定される。

以上より，コトのみの授受によって生じる属性転移は，遺物・遺構の表出・中間的属性が転移することである。これは変異性強・現地性弱である属性に対して移転制限しないので，転移先には弱い自発的動機によって属性の受容が起こった。

ｅ．物資の授受[22]によって生じる属性転移ⅰ

具体例として，東北北部北半・新潟県において後北C_1式の微隆起線・隆起線を沈線で模倣する土器が極少量出土（青森市小牧野遺跡，東通村大平４遺跡，大間町烏間遺跡，新潟市椋３遺跡）すること，東北地方から北海道へは二枚橋～田舎館２・３式の文様要素の一部が挙げられる。これらは移転先では遺物の表出的属性の一部が転移先の属性と混在することである。この場合は滞留型「渡海交易」により一部に文化異化が起こった。

以上より，物資の授受によって生じる属性転移の第一は，コトの授受が付帯する場合で，遺物の表出・中間的属性の一部が転移する。これは変異性強・現地性弱の属性対して移転制限しないので，

転移先には弱い自発的動機に基づく属性の受容が起こった。

ｆ．物資の授受によって生じる属性転移ii

具体例として，後北C_2・Ｄ式期の東北北部において北海道系墓制を伴わない土坑墓群（岩手県滝沢村仏沢Ⅲ・大石渡・安倍館遺跡など）にも北海道系土器が副葬される事象が少数あること，新潟県巻町南赤坂遺跡には後北C_2・Ｄ式と伴に帯縄文が付く土師器甕があり，岩手県九戸町長興寺Ⅰ遺跡には横位回転縄文を帯縄文に似せた深鉢があること，円・刺Ⅳ～Ⅴ期における縄文原体の変化が青森県でも並行的に極少数確認できるので北海道の属性が東北北部の一部に導入されたこと，東北地方から北海道への転移例には，円形・刺突文土器群Ⅶ期以降に土器成形の一部，円形・刺突文土器群Ⅺ期に土器成形・器形の一部，があること。具体例に共通するのは，属性が少量・継続的な場合は転移先の属性と混在することである。この場合は遺構・遺物の３属性が揃って少量・継続的に転移し，定住型渡海交易により「ソト」の関係の「ウチ」化がおこなわれたため，ある程度の文化異化が生じた。

以上より，物資の授受によって生じる属性転移の第二は，ヒトやコトの授受が付帯する場合で，遺物の表出・内在・中間的属性が揃って転移する。これは限定的量の属性に対して移転制限しないので，転移先には弱い自発的動機に基づく属性の受容が起こった。

⑶　属性転移と文化変容の関係

❷–1–⑴・⑵より，属性転移と文化変容の関係は次のように導かれる。内在的属性は親密な接触（深層的関係）でなければ伝わりにくいので，静的属性といえる。その転移には恒常的接触が必要となるので，遺物・遺構における型式変化の「大変」といえる。表出的属性は内在的属性よりは自由度があり，疎遠な接触においても（表層～深層的関係）成立するので，動的属性といえる。その転移には恒常的接触は必要ないので，表出的属性の転移は遺物・遺構における型式変化の「小変」といえる。また，属性数が多く・継続すると異化が拡大する傾向にあり，属性数が少なく・一時的だと異化が収束する傾向にあるので，転移する属性数の多寡・持続期間が文化変容に関わる。以上より，属性数・持続期間の量は「文化同化＜文化異化＜文化交代」が導かれる。

ヒト・コト・モノの授受によって生じる属性転移は，属性の組み合わせと属性数の多寡・持続期間の長短により文化変容に多様性をあたえる。

２．属性転移と属性分布圏

⑴　属性分布圏の諸形態

また，属性転移は同一時期において空間分布の差異としてあらわれる。一般的には各遺構・遺物はそれぞれに属性分布圏が成立する。前述したモノ・ヒト・コトの授受の内容と属性転移の状況より，属性分布圏は次のような変化が導かれる。「属性分布圏Ａ（転移元）と属性分布圏Ｂ（転移先）」が並立する場合，

第一に，３属性全ての授受をおこなわない場合は「属性分布圏Ａ≠属性分布圏Ｂ」が維持され，属性分布圏は分立する。

第二に，内在的属性のみを授受する場合は「属性分布圏Ａ≠属性分布圏Ｂ」が維持され，属性分

布圏は分立する。転移先では深層に文化異化を含む。

第三に，表出・中間的属性のみを授受する場合は「属性分布圏Ａ≒属性分布圏Ｂ」と変化する。属性分布圏は共立する。転移先では表層に文化異化が生じる。

第四に，少量の３属性が揃って継続的に転移する場合は「属性分布圏Ａ≒属性分布圏Ｂ」と変化する。属性分布圏は共立する。転移先では一部に文化異化が生じる。

第五に，多量の３属性が揃って継続的に転移する場合は「属性分布圏Ａ」に変化し，属性分布圏は合一される。転移先では文化交代が生じる。

以上の変化は，各遺構・遺物はその属性の種類ごとに多様な変容を生むのでそれら属性分布圏は一致することなく，各遺構・遺物の分布圏には完全な重複はみられず，そのためキメラ的状況が発生する[23]。

⑵　属性分布圏からみた渡海交易・文化変容

渡海交易のⅠ段階は中継ぎ式の滞留型渡海交易であるが，Ⅱ段階以降と異なり，拡張した域内交易が連接した形態であるから，従来の方式の発展形といえる。したがって，Ⅰ段階の渡海交易によって文化変容は引き起こされなかった。属性分布圏変化の第一にあたる。

渡海交易のⅡa段階には，北海道では移住が付帯する域内交易により文化異化が生じ，新潟県・東北地方でも滞留型渡海交易により微かに文化異化が生じる。これらは渡海交易↔域内交易↔生業の直結関係が成立したことによる文化変容であった。北海道内においては属性分布圏変化の第五にあたり，北海道と新潟県・東北地方の間では属性分布圏変化の第三にあたる。

渡海交易のⅡb段階には，北海道では文化交代が継続し，東北地方では渡海交易に少数者の移住が付帯し，モノの授受を維持するために文化異化[24]が継続した。この時期の前段にコト・モノの授受があったことも文化異化の拡大が抑制された一因である。渡海交易のⅢ段階はⅡb段階と同様の構造を維持する。北海道内においては属性分布圏変化の第五にあたり，北海道と新潟県・東北地方の間では属性分布圏変化の第四にあたる。

渡海交易のⅣ段階には主要な交易相手の交代により，転移する属性量が少なくなり文化異化が停止収束し，東北地方では蝦夷と北海道系続縄文人との間に混交が生じる。また，円・刺XI期～９世紀前葉における東北地方から北海道への属性転移（擦文文化の成立）は，交易仲介者としての役割を失った東北在住の北海道系続縄文人の後裔が故地に戻ったことによって生じたと考えられる［鈴木　信 2007］。北海道と新潟県・東北地方の間では属性分布圏変化の第四にあたり，東北地方内では属性分布圏変化の第一にあたる。

謝辞

この論文は，2006 年基幹研究「古代における生産と権力とイデオロギー」北海道研究会における発表を土台とし，数年間暖めていた「文化接触」についての私見をあわせたものです。拙考にもかかわらず投稿をお誘いくださった広瀬和雄様にお礼申し上げます。それから，拙考について貴重な教示・忌憚のない意見・寛容の心を持って検討をいただいた，青森県埋蔵文化財調査センター　木村　高，岩手県滝沢村埋蔵文化財センター　井上雅孝，札幌市埋蔵文化財センター　仙庭伸久，

千歳市教育委員会　豊田宏良様，査読者の方々に感謝いたします。

註

（1）――器種は，口径（口縁部の外縁周の直径）と器高（外底から最高喫水）の比によって分類する。倒円錐台形の形態は，深鉢・甕：口径÷器高＜1.25，鉢：1.25≦口径/器高≦1.50，浅鉢：1.51＜口径/器高≦3.00，皿：3.00＜口径/器高と呼称する。胴部最大径よりも著しく窄まる頸部を有する形態を壷と呼称し，口径と器高の比によって分類しない。器形は，耳がつく器形は「耳付＋器種名；耳付深鉢など」，片口が付く器形は「片口＋器種名，片口深鉢など」，注口が付く器形は「注口＋器種名，注口皿など」，把手がつく器形を「把手付＋器種名，把手付鉢など」と呼称する。規格は，深鉢・甕・壷については器高，鉢・浅鉢・皿については口径で分類した。深鉢・甕・壷の「大」：器高≧35cm，「中」：35＞器高≧25cm，「小」：25＞器高≧15cm，「袖珍」：15cm＞器高。鉢・浅鉢・皿の「大」：口径≧30cm，「中」：30＞口径≧20cm，「小」：20＞口径≧10cm，「袖珍」：10cm＞口径。「袖珍」と呼ぶが非実用を意味しない。

（2）――従来の北大Ⅰ～Ⅲ式には重複があり型式に当たらないので，「円形・刺突文土器群期：Ⅰ～Ⅺ期」を新設し，細分名称として「北大Ⅰ：多条の隆起線文・隆起線に似せる太い沈線文を施す」「北大Ⅱ：斜行縄文・斜行縄文下地に沈線文を施す」「北大Ⅲ：ミガキ・刷毛下地に沈線文を施す」「円形刺突文：円形刺突文のみを施す」「刺突文：円形刺突文がなく，ミガキ・刷毛下地に刺突文や沈線文を施す」「無文：文様がない」を用いた［鈴木　信 1999・2003 a］。

（3）――聖山KⅡ群は後北B～C_1式に並行し，口縁部に隆起線，体部に特殊縄文を沈線で囲う文様が備わると定義されている［石本省三 1983］。後北B並行期の聖山KⅡ群には突起から垂下する疑縄貼付文が付されており，突起基線縦位分割はすでに成立している。類例は北海道森町鷲ノ木遺跡，青森県脇野沢村九艘泊岩陰遺跡・青森市小牧野遺跡があげられる。なお，聖山KⅠ群は後北B式相当と報告［七飯町教育委員会 1979］されているが実見したところ後北A・古に当たる。

（4）――段を沈線によって模倣したものもある。沈線表現は接合面＝休止期ではないので，成形分類においては深鉢に入る。

（5）――青苗B式は，地文が横位斜走・斜位縦走縄文（Ⅳ群a類1種），地文が帯縄文（Ⅳ群a類2種）と定義されている［奥尻町教育委員会 1998］。1種には斜位横走縄文が混じり，2種は地文が斜位縦走縄文で口縁部文様が帯縄文である。この特徴を道央に対比させるとⅣ群a類1種はH 317期，Ⅳ群a類2種はH 37栄町期にあたる。同様の比定がすでに言表されている［福田正宏 2007］。なお報告書ではⅣ群a類2種のなかに斜位横走縄文が僅かに含まれているが，これは帯縄文とはいえないのでⅣ群a類1種にあたる。

（6）――後北C_2・D式の分類基準である曲線帯縄文は，道南（聖山・鷲ノ木遺跡等）・道央（稀府川・大町2遺跡）にあるので，現時点では曲線帯縄文は道南・道央が発現域と考えられる。

（7）――ただし，ともに平底の底面を始発として体部を倒円錐台形に，休止期を設けず成形してゆくので，深鉢成形の延長にある。このことから形態上から命名された「甕」よりも，成形の系譜がたどれる「深鉢」の名称が適当である。なお北海道には長胴甕B系統の技法が伝わってない。

（8）――釧路市興津遺跡・釧路市幣舞遺跡では帯縄文が付く土器が極少量出土しているが，上半の器形が内弯または直上・底部形態が小径の高台状を呈する。釧路地域の興津式の定義と異なるようにも見えるので類例の増加を待って検討したい。

（9）――墓坑平面形は，下端の幅/長≧0.8：円・隅丸方・方形，0.8＞下端の幅/長0.5≧：楕円・隅丸方・小判・方形，0.5＞下端の幅/長：長楕円・隅丸長方・小判・長方形とした。舟形は比では長楕円形に含まれる。

(10)――下端平面形に長短軸が設定できて，長軸方向において袋状土坑が備わる面を正面としたときの左右。なお円形は長短軸が設定できないので袋状土坑と下端平面形との関係は不明。

(11)――合葬は，平面形は単葬墓と同じ，規模が大型である（後北C_1式期には合葬・追葬専用の舟形土坑が登場する），複数遺体が坑底に整然と安置される，付属施設が遺体数に相応しない，があげられる。追葬は，平面形・規模は単葬墓と同じ，一部の人骨が生体的位置を保持しない，付属施設が遺体数に相応する，があげられる。一部の人骨が生体的位置を保っていないことに関しては墓坑を共有したことがうかがえ，柱穴様土坑に関しては墓坑を共有して外部付属施設のみを変更する。再葬は，

生体的位置を保っていない・部位が足りない人骨埋葬状況である。

(12)――「生羆2頭・羆皮70枚」はヒグマが生きていること・多量の毛皮であることから，粛慎が自ら調達した交易品を降伏の証として献じた可能性が高い。

(13)――考古学において，「渡海交易」は文化人類学用語を借用して「長距離交易」と呼ばれる。その用語は南太平洋の民族例に基づくものであり，南太平洋では「ウチ」の関係で行われ，ものの価値が変質しない(儀礼的・贈与的交換)・変質する（取引的・売買的交換），二面性を持つ。いっぽう，北海道と北日本との交易は「ソト」の関係または「ソト」の「ウチ」化がおこなわれる場合が典型であり，価値がしばしば変質する（取引・売買的交換)。文化人類学が示す事例と考古学における借用の意図は，北海道と北日本の状況と合致しないので，この広域交換を「渡海交易」と呼称する。

(14)――もうひとつの石斧石材産地（神居古潭渓谷）は道央北端～道北南西端に位置する。道央北端の深川市では道央固有の土器が存在するものの少数例道東の土器も出土する。これは道央日高と同じ状況であり，同様の交易をおこなっていた可能性を示唆する。

(15)――青森県埋蔵文化財調査センター木村　高氏のご教示による。

(16) ――後北Ｂ式は青森県までは出土例があり新潟県には今のところ出土していない。ただし，新潟県に出土する聖山ＫⅡ群は後北Ｂ式並行期を含む可能性もある。現時点では青森より南では中継ぎ式の滞留型交易を行なっていたと考える。

(17)――なお，海獣猟は威信的漁労でありながら，資源効率の良さ（＝食糧以外に骨角器の素材・獣油・獣毛皮の確保）もあり，渡海交易の対価ともなる。暖流系大型回游魚漁は威信行為としての性格が強いが，資源効率・対価価値が劣る［西脇対名夫2001，鈴木　信1994］。この違いが聖山ＫⅡ群・後北Ｂ式期以降に漁労を移出財確保のため海獣猟へと傾斜させ，暖流系大型回游魚漁に重きを置く恵山型漁労体系を消滅させた。

(18)――東北地方に出土する北海道産黒曜石は原産地から遠く離れているため物理的距離においては渡海交易に当たるように見えるが，北海道墓制と並行してあるので，海を隔てた「ウチの関係」における交換とも考えられ，上位の域内交易に当たる。

(19)――「個人分散型」とは個人的技術の差で成果が変動し成果は個人に還元される。狩猟（弓・罠など）と漁労（銛など）による毛皮獲得猟がある。「団体集約型」とは個人的技術差よりも技術の共有の規模で成果が変動し，成果は集団に帰属し，集団内の個人に分配される。採集・雑穀栽培・魚留柵による河川鮭鱒漁がある。アイヌ文化の民族例によると，毛皮獲得狩猟は主として個人的（家族・血族を含む）な猟であり，毛皮の共同体内への配分はない。鹿追込み猟は主に共同体（血族・姻族を含む）による猟で，魚留柵による鮭鱒漁は共同体による漁であり，配分がある。また，非毛皮獲得猟のメカジキ漁は，個人的猟であっても肉は共同体に配分される。獲得物配分の可否は，配分のある場合が共同体的財の性格を帯びる干鮭・鹿肉＝食料（域内交易品目）であり，配分のない場合が個人的財の性格を帯びる陸獣・海獣毛皮（渡海交易品目）である。［鈴木　信2007］。そして，前述したように石鏃・石斧など生業を反映する副葬品は性別を反映する副葬品でもあることから，生業には性分業があると解釈でき，男女の両系によってそれが統御されることをうかがわせる。

(20)――分析対象は土器型式による詳細時期が明らかな墓坑が10基以上ある遺跡に限った。金属器の副葬率の算出方法は，金属器あり墓坑数／詳細時期が明らかな全墓坑数。後北C_2・Ｄ式期：七飯町桜町（0/30基）・小樽市蘭島餅屋沢（0/40基）・北見市常呂川河口（1/30基），円形・刺突文土器群期：恵庭市ユカンボシＥ7（5/14基）・恵庭市西島松5（18/30基）・江別市大麻3（0/14基）・江別市吉井の沢（2/25基）。後北C_2・Ｄ式期では２％，円・刺Ⅰ～Ⅴ期までは５％，円・刺Ⅵ～Ⅷ期では50%，円・刺Ⅸ～Ⅺ期では78%である。後北C_2・Ｄ式期～円・刺Ⅴ期は鉄器の副葬が稀な時期であり，円・刺Ⅵ期以降は鉄器の使用・修繕・再生の循環を上回る量の所有が可能になったと推定される。

伝世（単葬墓において，土器と大刀・横刀の時期に差がない場合）をみると，横刀と土器の供伴4例において「時期差ナシ」が小樽市蘭島Ｄ遺跡84-11Ａ土坑，「土器がやや古い」が恵庭市西島松5遺跡Ｐ11・30，「土器が古い」が西島松5遺跡Ｐ128である。大刀と土器の供伴例は西島松5遺跡Ｐ98（２回追葬）があり，大刀：７世紀第２四半期，土器：６世紀中～後葉，横刀：時期不明である。少なくともⅨ～Ⅹ期には大刀・横刀の伝世はないと考えられるので，大刀・横刀は個人財と考えられる。ただし，副葬大刀には墓坑底に突き立てられ佩用を再現した可能性もある例がある（恵庭市西島松5遺跡Ｐ96：円・刺Ⅹ～Ⅺ期，Ｐ98：円・刺Ⅹ期）あるので，その用途が理解された象徴材的個人財である。象徴財的金属製品の多寡に相関して土坑墓の型式に差はみられない。

よって，その蓄積差は「富者と貧者」以外の関係を示さない［鈴木　信 2008］。

また，金属製品以外に性的に中立・地域的に偏在しない副葬品であるガラス小玉は金属器と同じように蓄積差を示す可能性がある。

(21)――註19に同じ

(22)――交易品の授受は物体自体の授受であるから属性転移ではない。具体例として，北海道内における域内交易品（琥珀・黒曜石・頁岩）の移動，北海道と東北地方における渡海交易品（石斧石材↔翡翠・幼猪・碧玉管玉・南海産貝装飾品，毛皮↔ガラス小玉・鉄器）の移動，がある。

(23)――遺構・遺物の時間・空間はそれぞれ独立的に検証することは可能であるが，空間については時間・異系統の検討を経て事後的に，細分的に検証される。したがって，考古学における文化圏は前提ではなく，個物・個物間の同時空に保障された概念である。よって，文化圏の創設は遺構・遺物の多様な変容に対して妥当な条件が必要となる。条件の妥当性の検証には3属性の階層的関係が考慮されなければならない。

(24)――後北C_2・D式期にヒグマ―イノシシ信仰の結合が解け始めてヒグマを具象化する行為（「全的動物霊」の信仰）も不振になる。その原因は，信仰対象の一部（ヒグマの毛皮・胆）が異人（続縄文人にとっては蝦夷・倭人）に渡ることである。そのため，信仰対象が分裂することで神格を失わない構造，信仰対象の一部が信仰を異にする異人にわたることへの合理的説明，が必要となり，「ヒグマの精神（神格）と肉体の分離（毛皮・胆の分離），神格のみの循環＝富根源の循環，神から人への肉・毛皮の贈与」という信仰体系化（宗教的合理化）を円形・刺突文土器群期に確立させた。くわえて，富と富の根源を分けることで，神と人の間に循環する仕組み，異人へつながる非循環の仕組み，がそろう［鈴木　信 2007 b］。このようなことから，東北に移住した当初には北海道続縄文人にも信仰において文化異化が生じていた可能性がある。ただしこの異化は円・刺Ⅸ～Ⅺ期における北海道系土器・墓制の消滅からみると文化同化によって解消されたと考えられる。

参考文献

相沢清利 2002：「東北地方における弥生後期の土器様相」『古代文化』54-10　古代学協会，47～62頁
青野友哉 1999：「碧玉製管玉と琥珀製玉類から見た続縄文文化の特質」『北海道考古学』第35輯，北海道考古学会，69～82頁
赤石慎三 2001：「縄文時代晩期後葉から続縄文時代初頭の突瘤文土器について」『所報』3，苫小牧市埋蔵文化財調査センター，19～30頁
阿部義平 2008：「寒川遺跡・木戸脇裏遺跡・森ヶ沢遺跡発掘調査報告〈下〉」『国立歴史民俗博物館研究報告』第144集，国立歴史民俗博物館，20～60頁
石川　朗 1999：「Ⅵ．まとめ」『幣舞遺跡Ⅳ』釧路市教育委員，241～253頁
石本省三 1979：「聖山遺跡出土の続縄文式土器について」『聖山』，七飯町教育委員会，159～172頁
石本省三 1983：「北海道南部の続縄文文化」『北海道の研究』1，清文堂，319～172頁
臼杵　勲・熊木俊朗・高瀬克範 2007：「北海道における続縄文～アイヌ文化期の暦年代の検討」『北海道における古代から近世の遺跡の暦年代』臼杵勲，48～54頁
宇部則保 2005：「東北北部型土師器にみる地域性」『海と考古学とロマン』市川金丸先生古希記念論集刊行委員会，274～265頁
宇部則保 2007：「青森県南部～岩手県北部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』辻秀人，東北学院大学文学部，260～284頁
内山敏行 2003：「古墳時代末期の長頸鏃」『武器生産と流通の諸画期』七世紀研究会，27～42頁
内山真澄 1998：「続縄文期における石鏃の変化」『時の絆』石附喜三男先生を偲ぶ本刊行委員会，167～179頁
大坂　拓 2007：「恵山式土器の編年」『駿台史学』第130号，明治大学，53～83頁
岡部雅憲・小笠原正明 1995：「北海道の遺跡から出土したガラス玉の化学組成」『北海道考古学』第31輯，北海道考古学会，291～305頁
奥尻町教育委員会 1999：『青苗Ｂ遺跡』，48～63頁
加藤邦雄 1982：「道南・道央地方の墳墓」『縄文文化の研究』第6巻，雄山閣，35～47頁
北見市教育委員会 1978：『北見市中ノ島遺跡発掘調査報告書』，16～18・139～145頁
熊木俊朗 1997：「宇津内式の土器編年」『東京大学考古学研究室紀要』第15号，東京大学文学部，1～38頁
熊木俊朗 2000：「下田ノ沢式土器の再検討」『物質文化』64　物質文化研究会，40～58頁

熊木俊朗 2002：「後北C_2・D式期土器の展開と地域差」『トコロチャシ跡遺跡』東京大学，177～217 頁
熊木俊朗 2004：「鈴谷式土器編年再論」『アイヌ文化の成立』宇田川洋先生華甲記念論文集刊行実行委員会，167～189 頁
小泉好延・小林紘一 1999：「榎田遺跡より出土したガラス玉の分析」『榎田遺跡』長野県埋蔵文化財センター，343～347 頁
斎野裕彦　1998：「北海道・東北の柱状片刃石斧」『北方の考古学』野村崇先生還暦記念論集刊行会，287～312 頁
設楽博己　2003：「続縄文文化と弥生文化の相互交流」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 108 輯，国立歴史民俗博物館，17～42 頁
鈴木　信 1994：「威信経済としてのメカジキ漁」『考古学と信仰』同志社大学考古学研究室，333～348 頁
鈴木　信 1999：「北大式期以降の墓制について」『シンポジュウム　海峡と北の考古学』日本考古学協会，255～286 頁
鈴木　信 2003 a：「道央部における続縄文土器の編年」『ユカンボシC 15 遺跡(6)』北海道埋蔵文化財センター，410～452 頁
鈴木　信 2003 b：「続縄文～擦文文化期の渡海交易の品目について」『北海道考古学』第 39 輯，北海道考古学会，29～47 頁
鈴木　信 2004 a：「北大式土器の型式論的処理に関する問題に対する見解」『シンポジュウム　蝦夷からアイヌへ』天野哲也・小野裕子，北海道大学総合博物館，304～339 頁
鈴木　信 2004 b：「古代北日本の交易システム」『アイヌ文化の成立』宇田川洋先生華甲記念論文集刊行実行委員会，65～97 頁
鈴木　信 2005 a：「北・東日本の出土刀にみる湾刀の起源」『考古学ジャーナル』№532，ニューサイエンス社，10～14 頁
鈴木　信 2005 b：「古墳時代並行期の北海道系墓制」『北方の境界接触世界』七世紀研究会，47～62 頁
鈴木　信 2006：「集成図の概説」『西島松 5 遺跡(4)』北海道埋蔵文化財センター，154～156 頁
鈴木　信 2007 a：「アイヌ文化の成立過程」『古代蝦夷からアイヌへ』吉川弘文館，352～390 頁
鈴木　信 2007 b：「「仔熊飼育型熊送り」の成立とその背景」『考古学に学ぶⅢ』，同志社大学考古学研究室，651～661 頁
鈴木　信 2008：「続縄文文化の鉄器・石器・渡海交易の関係について」『続縄文文化とはなにか』北海道考古学会，11～17 頁
鈴木　信・豊田宏良・仙庭伸久 2007：「北海道南部～中央部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』辻秀人，東北学院大学文学部，18～21 頁
高倉　純 2005：「K 39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点から出土した竪穴住居の検討」『K 39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点発掘調査報告書Ⅱ』北海道大学，108～115 頁
高倉　純 2006：「石狩低地帯北部の続縄文時代石器群」『ムラと地域の考古学』同成社，147～171 頁
高瀬克範 1998：「恵山式土器群の成立と拡散とその背景」『北海道考古学』第 34 輯，北海道考古学会，21～41 頁
高橋　哲 2005：「続縄文文化後半の石器研究」『北海道考古学』第 41 輯，北海道考古学会，21～38 頁
千代　肇 1988：「続縄文文化の石器」『考古学ジャーナル』№287，ニューサイエンス社，21～28 頁
中村晋也 2006：「金沢市内の遺跡から出土したガラス玉の科学的研究」『金沢学院大学紀要』第 4 号，金沢学院大学，137～148 頁
七飯町教育委員会『聖山』，159～172 頁
七飯町教育委員会『国立療養所裏遺跡』，333～337・474～476 頁
西脇対名夫 2001：「魚形石器ノート」『渡島半島の考古学』南北海道考古学情報交換会，116～125 頁
西脇対名夫 2004：「関連資料調査」『恵山町 恵山貝塚』北海道立埋蔵文化財センター，79～103 頁
林　謙作 1990：「縄文土器の型式(1)」『季刊考古学』第 32 号，雄山閣，85～92 頁
林　謙作 1990：「素山上層式の再検討」『考古学古代史論攷』伊藤信雄先生追悼論文集刊行会，105～162 頁
広田良成 2003：「続縄文時代の環状装飾品について」『北方島文化研究』第 1 号，北方島文化研究会，51～57 頁
福田正宏 2007：「宗谷海峡周辺における続縄文土器の成立と展開」『極東ロシアの先史文化と北海道』福田正宏，125～140 頁
松田宏介 2005：「日高地方東部における続縄文期の土器様相」『北海道考古学』第 41 輯，北海道考古学会，1～20 頁
松田宏介 2006：「続縄文期における日高地方在地土器群の系譜」『北海道考古学』第 42 輯，北海道考古学会，61～74 頁

松田宏介 2007：「粗製石鏃小考」『北海道考古学』第43輯，北海道考古学会，81～95頁
松田宏介・青野友哉 2003：「豊浦町礼文華遺跡出土土器群の再検討」『日本考古学』第16号，日本考古学協会，93～110頁
峰山　巌 1668：「恵山式土器」『北海道考古学』第4輯, 北海道考古学会，50頁
宮本長二郎 1996：「北海道の竪穴住居」『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版，55～72頁
森町教育委員会 2008：『鷲ノ木遺跡』，116・407頁
八木光則 2003：「７・８ 世紀鉄刀の画期と地域性」『武器生産と流通の諸画期』七世紀研究会，43～56頁
山田晃弘 2008：「東北地方における古墳時代の黒曜石製石製品」『考古・民俗・歴史学論叢』芹沢長介先生追悼論文集刊行会，433～448頁

挿図出典

図２：１はユカンボシE７遺跡包含層・恵庭市教育委員会（1995），２は元江別１遺跡墓44・江別市教育委員会（1981），３は大川遺跡GP-88・余市町教育委員会（2000），４は大川遺跡GP-163・余市町教育委員会（2000），５はS 354遺跡４号ピット・札幌市教育委員会（1982），６は苫別遺跡包含層・えりも町教育委員会（1996），７は国立療養所裏遺跡包含層・七飯町教育委員（2000），８は小牧野遺跡包含層・青森市教育委員会（1996），９は聖山遺跡ブロックＫＩ・七飯町教育委員（1979），10は常呂河口遺跡ピット351ｃ・常呂町教育委員会（2004），11は興津遺跡包含層・釧路市教育委員会（1979），12は栄浦第二遺跡ピット28・常呂町教育委員会（1982），13は南赤坂遺跡新潟県１号住居址・巻町教育委員会（2002），14は上段テラス下土坑・南赤坂遺跡新潟県巻町教育委員会（2002），15は長興寺Ｉ遺跡68号土坑・岩手県文化振興事業団（2002），16はオサツ２遺跡包含層・北海道埋蔵文化財センター（1995）
図３：宇部則保 2007，鈴木　信・豊田宏良・仙庭伸久 2007より引用加筆
図４：１は南川遺跡13号墓・瀬棚町教育委員会（1976），２は南川遺跡16号墓・瀬棚町教育委員会（1976），３はS 135遺跡Ⅶｃ層・札幌市教育委員会（1987），４は常呂河口遺跡ピット997・常呂町教育委員会（2006），５はワッカオイＤ遺跡包含層・石狩町教育委員会（1977），６は常呂河口遺跡ピット1025・常呂町教育委員会（2006），７は元江別１遺跡墓19・江別市教育委員会（1981），８はアヨロ遺跡墓105・白老町教育委員会（1980），９は中ノ島遺跡Ａ号遺構・北見市教育委員会（1978），10は南川遺跡12号墓・瀬棚町教育委員会（1976），11はS 135遺跡焼土151札幌市教育委員会（1987），12はポプラ並木東地区遺跡包含層・北海道大学（1987），13は元江別１遺跡墓16・江別市教育委員会（1981），14は大川遺跡GP-359・余市町教育委員会（2000）
図５：鈴木　信 2005ａ・2006より引用加筆
図６：鈴木　信 2005ｂより引用加筆,「秋田・長軸２本配置」は寒川Ⅱ遺跡４号土坑墓・秋田県教育委員会（1988）
図７：１は栄浦第二遺跡・13号竪穴東京大学（1972），２は北広里３遺跡１号住居・深川市教育委員会（1994），３は南川遺跡16号住居・瀬棚町教育委員会(1983)，４はN 30遺跡５号竪穴住居・札幌市教育委員会(2004)，５は常呂河口遺跡69号竪穴・常呂町教育委員会（2002），６は常呂河口遺跡149号竪穴・常呂町教育委員会（2006），７は末広遺跡ＩＨ95・千歳市教育委員会（1985）
図９：鈴木　信 2004ｂより引用加筆
図10：鈴木　信 2004ｂより引用加筆

（北海道埋蔵文化財センター，国立歴史民俗博物館研究協力者）

（2008年9月30日受理，2009年1月21日審査終了）

Structures of Transferring Material Cultural Attributes on Intercultural Contacts in Epi-Jomon Culture

SUZUKI Makoto

Ruins and artifacts from Epi-Jomon culture have the expressive attributes of "high variability, wide-ranging localization, being easily transferable and not going missing when transmitted." They possess the inherent attributes of "low variability, narrow-ranging localization, being not easily transferable and becoming easily lost when transmitted." And they posess the neutral attributes between the expressive attributes and the inherent attributes. The strength or weakness of the immutability and localization of attributes means "the inherent attributes of ruins≧the inherent attributes of artifacts > the expressive attributes of ruins > the expressive attributes of artifacts. Further, inherent attributes are transferred through close contact and expressive attributes develop under estranged contact. As a result, the transfer of inherent attributes constitutes a "major change" in type and the transfer of expressive attributes consticutes a "minor change" in type.

Type changes to ruins and artifacts involve the transfer of attributes over time and space and appear in first to fifth types that represent variations in spatial distribution. Attributes transfer incidentally with the transfer of abstract things, material things and people, and bring about cultural assimilation, cultural dissimilation and cultural replacement at the destination of the transfer.

The exchange of material things is a type of cultural contact. In heterogeneous contact (overseas trade) there is "involvement" in order to move "material things" and physical distance is overcome by making close-knit social relationships ("outside" relationships become "inside" relationships"). In the case of homogeneous contact (intraregional trade), "Material things" move as a result of "involvement" and this contact occurs on top of relationships ("inside" relationships) with constantly narrowing social distance.

In Late Yayoi the advent of iron edge tools in the Tohoku region was a contributing factor to overseas trade, intraregional trade and subsistance relationships. Later, the increase in the distribution volume of iron goods demanded stronger regulation of traded goods in intraregional trade, which created a dual subsistance structure of hunting for fur as a resource for trade and the subsistances that supported it. In the IIa stage of overseas trade, cultural dissimilation occurred as a result of the direct coupling of overseas trade, intraregional trade and subsistance. In stages IIb-IV of overseas trade, cultural dissimilation continued due to constant demand for steel materials and iron goods. In stage IV, cultural dissimilation converged, and there was further transfer of attributes from the Tohoku region to Hokkaido as Epi-Jomon people from Hokkaido living in Tohoku returned to their homeland after losing their role of trade intermediaries (the advent of Satsumon

culture).

Keywords: the expressive attributes, the inherent attributes, the neutral attributes, overseas trade, intraregional trade, cultural assimilation, cultural dissimilation, cultural replacement